

マルクス主義

11

1979年 8月創刊

一向 健

民族民主主義革命とプロレタリア・ヘゲモニー

日本社会科学研究所（マルクス・レーニン主義毛沢東思想）

定期購読を

労農通信

月2回刊(1日、15日発行)

- 既刊 創刊号…宣言、ソ社会の経済構造(連載～3号)残部ナシ
2号…我々の歴史的到達地平
3号…連合赤軍問題総括と女性解放
4号…極「左」無政府主義婦人解放路線を一掃しよう
5号…当面の国内情勢の特質をいかにとらえるか
6号…労基法改悪の策動を許すな
7号…北方領土返還要求運動を前進させよう(連載～8号)
8号…利根一郎氏からの返信
9号…高原・八木君の批判に答える
10号…死刑制度を撤廃しよう

定価 200円 送料 100円

購読 6ヶ月 3,600円 1年 7,000円

定期購読申し込み先

(〒) 100-91 東京中央郵便局私書箱第1292号
日本社会科学研究所

マルクス主義

創刊号 目 次

連続革命と革命発展段階論——そこが要

資料 ②

レーニン的二段階戦略の獲得を

資料 ①

民族民主主義革命とプロレタリア・ヘゲモニー
—日本社会と権力の客観的実際の分析を基礎として—

レーニン的二段階戦略の復権

レーニン的二段階戦略の復権

民族民主主義革命とプロレタリア・ヘゲモニー

— 日本社会と権力の客観的実際の分析を基礎として —

一 向 健

『解題』この論文は立志社「アカハタ」への通信として執筆されたものであり、彼らとの論争の形をとっている。しかし読者はその形式にとらわれる必要はない。この論文の語るところは広く現代日本の共産主義運動の針路を決める論争を提起し、解明するものであり、さまざまな角度から論議されるに足るものである。読者諸兄姉の批評、意見を当研究所に寄せられるよう要請したい。なお、表題、見出しあは編集委員会の責任でつけられた。

— 「マルクス主義」編集委員会

常盤君等「アカハタ」編集局のみなさんへ

(一) はじめに——論点の設定

私の意見、早速掲載してくださり、丁寧で誠実な返事をくださってありがとうございます。貴兄方の団結の願いをじゅうぶん理解し、論争の継続のよびかけを心から歓迎するものです。

七〇年中期を前後にし、現在は、世界と日本的情勢が大激変し、相対的安定期から七〇年安保大会戦を闘った革命派も、決定的な分化・再編をむかえています。この分化・再編は、戦後階級闘争史から見れば、五〇年代中期を前後にする分化・再編期につづく第二の根本的再編期といえます。

この再編は、相対的安定期に形成された党派の立脚点を容赦なく点検し、再検討を迫り、必要な清算を迫つており、別の観点からみれば、戦後革命の敗北の右翼日和見主義的総括にもとづく修正主義に対し、小ブルジョア急進主義

的反発として成立した新左翼トロツキズム（や毛派）の革命派が前進していくためには、その「左」右の小ブルジョア性一とりわけ、現段階には「左」のそれ一をマルクス・レーニン主義、毛沢東思想を獲得し、この立場から革命的に清算し、ソ米世界戦争を軸とする戦争と革命の八〇年代九〇年代に対応しうる、正しい基本的政治路線やこのもとの現段階の政治路線や政策を獲得することが要求されています。いわば、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想の全般的理解とその実際への適用が問われています。別の面からいえば、種々な問題が山積し論議が百出していることは、人が活性化し、これを正しく総括すれば人民の大きなエネルギーをくみあげ一つの方向にまとめあげら

れるということを意味し、やりがいのある時期ともいえます。

だから我々の論争は、この要請にいくらかでもこたえ、闘う労働者人民に少しでも役にたつものになるべく展開されるべきと思います。この点で私は、團結一批判一大團結の論争における基本原則をかけ値なしに実現しうるような相手を見出したものと信じています。（また、論争してみれば、多分我々が大局、基本方向性において完全に一致していけるものと確信しています）

かくいう私も、ご承知のように、この一つの先駆とともにえた連合赤軍問題総括論争において、第一段階の総括をやり、一定の成果をおさめ活動を開始するも、その総括の根本的不十分性を痛感し、再出発せんとする立場にありますし、論争は新たに獲得しつつある立場を試し、点検してゆくものとしてあります。

常盤君は、論争領域を、第一「思想方法」の問題、第二その「思想方法」としての常盤君達の「連続革命と革命発展段階論」の見地を説明され、第三に、この見地にたつ「日本革命の戦略と現段階の政治路線について」、第四に「戦後革命における諸問題について」と、四つの分野に設定されています。私は、このような論点設定に基本的に異議はないですが、第三に第四を加え、第四には現段階の政

路線の論点をもつてきた方がスッキリするかも知れないと思つたりもします。前回の寄稿文（本誌掲載「資料」①参考編集委）もこういう方向で問題をだしていたと思います。

全体の貴兄の返信の印象ですが、私も問題にし、貴兄も「思想方法」として問題にされているように、民主主義革命と社会主義革命の関連、あるいは、民主主義革命を達成した国での民主主義のための闘争と社会主義革命の関連、あるいは、社会主義のための闘争と民主主義のための闘争の一般的意義とその相互関連についてマルクス・レーニン主義、毛沢東思想主義者はいかにとらえるか、という問題があります。これは革命に対する根本的立場・観点・方法ともいうべき問題です。この問題に対する思想の概括の表現方法を「連続革命と発展段階論の統一」というか「レーニン的二段階戦略」というかはたいした問題ではなく、問題はその内容だと思います。この点で我々は、マルクスやレーニンの思想、毛沢東の思想を厳密に点検し、トロツキーやエルフエルト綱領の問題やスターリンの評価、日「共」宮本一派批判の観点を厳密に規定する必要を感じます。私はこの点で、貴兄が今ひとつ、形式ではなく内容の問題として勘どころをつきだしきれてない印象を受けます。

今一つは、我々の革命の根本的立場・観点・方法と基本

政治路線、当面の政治路線や政策、任務等について若干の誤解があります。この「混合」の問題はたやすく解決します。

第三は、革命に対する根本的立場・観点・方法の差異と根底においては結びつきつつも、かなり相対的独自の問題としてある当面の日本革命の基本政治路線に関する種々な論点があると思いますが、この問題については戦後革命の敗北の総括の部分をかみあわせると論点が整理され、解決の方向を見出すだろうと思いました。この点で「戦後民主主義革命は敗北したのに、民主主義革命の課題はほぼ達成された」とする貴兄の背理した意見が検討されるべきと考えます。

第四の現段階の政策や任務については、貴兄方が「世界戦争の第一段階」といいつつも、四つの基本矛盾のうち、ソ米帝国主義相互の矛盾ではなく、帝国主義と被抑圧民族の矛盾を現代世界の主要矛盾にしていること

これとの関連で、国内情勢で対ソ民族矛盾の増大を指摘しつつも、今なお「階級矛盾」が主要矛盾として規定され

私はこの四つの対外対内基本矛盾論とその設定方法については異論がありますが、積極的な政治路線上の問題提起（第二次世界大戦の総括や対ソ宥和主義と大平、田中等を区別する問題や三自主義路線、あるいは対ソ宥和主義のバッ

(二) レーニン的一段階戦略の根幹と われわれの立場

中 わ れ わ れ の 立 場

し、⑤世界を『四つの基本矛盾』の観点でとらえた反帝反独占の民族民主主義革命路線を基本政治路線とし、⑥当面のソ連社会帝国主義を戦争の第一の策源地としたソ米世界戦争の不可避性と現実性を特質とする『三つの世界』論に概括される一時代における、ソ連社会帝国主義の霸権主義重視の反霸権民族民主主義革命路戦、⑦条件のいかんによつては対ソ反霸権反侵略民族自衛戦争を開う布陣に全面的に転換してゆく路線に立脚しています」（P.1, ⑧⑨⑩⑪⑫）

のアルファベットと傍点は筆者）と展開されています。

②で、マルクス主義の科学的社会主义の思想としてのプロレタリア革命の原則的綱領、あるいは、同じこととしての資本主義社会のプロレタリアート・人民が社会主义革命を通じて到達すべき最大限綱領をこういう形で略して表現し、⑥で、日本社会がおかれている世界の基本的特質を概括しつつ、個別の日本社会とそこにおける権力の特質から導かれる革命の基本性質・基本政治路線をのべ、⑦で、この基本政治路線の中での現段階の政治路線を重視し、⑧は⑨の段階の変化の可能性を予見し、⑩の当面の政治路線が変化しうる可能性を補足したものです。この引用で、革命の性質に関する政治路線と基本政治路線の現段階での展開形態を混同していないことは了解されたと思います。ただ「プロレタリア・ヘゲモニーのもとでのソ連社会帝国主義の反霸権

・反帝反独占民族民主主義革命」とかとして、プロレタリアートの原則綱領の立場、指導権の問題や、当面のせまい意味での政治路線や革命の性質をあらわす基本政治路線等、三つの特質を一単語に凝集した表現もしています。これは、意識的に合成表現をし概括せんとしたものですが、それが「混同」の誤解をまねいたものと思います。

＊ レーニンの二段階戦略

○レーニンは、ロシア革命が民主主義革命から社会主义革命に発展転化してゆく見通しをもちつつ、それを、トロツキーのごときをもて漠然としたロシア社会とその権力をめぐる階級関係の非科学的把握にもとづく政治過程の永続的展開の直観的な見通しと、その見通された過程での「革命主体としての個人」の断固たる永続的過程的推進一面化する非科学的非階級的革命論に比して、マルクス主義に立脚し、ロシア社会とその権力の特質・階級の相互関係を科学的に分析し、民主主義革命における敵と味方、同盟軍、とりわけツァー体制下で発展する資本主義がもたらす新しい階級関係と社会主義革命の条件とそこにおける敵と味方、同盟軍を分析し、そこから両者の連関構造を分析し、民主主義革命においてブルジョアジーをおしのけつつ指導的階級として登場するプロレタリアートの意義づけや、ブ

準備を推進することを「かたときも忘れ」なかつたこと。
そのことによつて「新しい型の民主主義革命路線」を導いたこと。

○レーニンの解放、社会主义革命にとって民主主義革命は前提条件であり、その前提条件をまずプロレタリアートは勝ちとらねばならないこと、にもかかわらず民主主義革命は封建的地主的土地所有を打破し、資本制所有を全社会的に生みださず、社会主義革命とはちがつて資本所有関係には手をつけないものである以上、民主主義革命の立場、つまり小ブルジョアジーや自由主義的ブルジョアジーの立場にプロレタリアートの階級的独自性を解消したり低めたりすることなく、独自に資本主義批判を要とするマルクス主義の世界觀でプロレタリアートが武装し、プロレタリア党を建設、強化し、民主主義革命の中で社会主義革命の準備を組織してゆかねばならない。いわば民主主義革命のための闘いの組織化をも開う一個二重の組織化を主張したわけです。これがレーニンのロシア革命論であり、私の述べるレーニン的な、プロレタリア・ヘゲモニーのもとでの二段階戦略の内容です。

トロツキーは社会主義革命論者のようにだが、実は個人主

主義闘争を戦術急進的に展開すれば自然に、プロレタリアートの独自の社会主義的組織化の闘いぬきに民主主義闘争が民主主義革命に発展し、かつ社会主義革命に発展転化していくと考えたわけです。だから民主主義闘争も目いつぱいに広く、深く組織化して闘うこともできず、当然にも社会主義のための闘争も闘えなかつた。だからトロツキーはプロレタリア社会主義革命を追求しているようで、実際は農民ばかりでなくプロレタリアートにすら依拠、結合できず、その階級依拠基盤は小ブルジョアインテリゲンチャでしかなく、民主主義革命も組織、指導できず、いわんや社会主義革命など組織、指導できるわけがなかつた。

レーニンは民主主義革命と民主主義闘争を闘うこと、そのため小ブルジョアジーや自由主義ブルジョアジー（とりわけ急進的な農民）との統一戦線を極力推進したが、プロレタリアートの立場を小ブルジョアジーや自由主義ブルジョアジーの立場に低めたり、解消しなかつた。このことをレーニンは「プロレタリアートの階級的独立性」の堅持といつたり、「ブルジョアジーに対するプロレタリアートの闘争をかたときも忘れてはならない」等の言葉にあらわしています。レーニンのこのような思想はナロードニキの「ロシア社会の市場欠如ゆえ資本主義未発達、それゆえプロレタリアートの指導権のもとでの二段階戦略は不可能で、

レーニンの「プロレタリアートの指導権」「階級的独立性」「ブルジョアジーとの闘争をかたときも忘れない」といった政治思想内容にはマルクス主義への全面的信頼と資本主義批判を要とするマルクスのプロレタリア的世界觀の吸収があり、小ブルジョア・ブルジョア民主主義思想、理論に対する激しい闘争があつたわけです。そしてこの民主主義革命、民主主義闘争におけるプロレタリア・ヘゲモニーの思想はスターリン、毛沢東によつてうけつがれつつも、現在の日本の毛派の場合マルクス資本主義批判が吸収できていないから「プロレタリアートの指導権」「プロレタリアートを指導的階級とする」等が語られつつはあるがその意味が理解されきれず死にかかるつており、プロレタリアートを民主主義革命における单なる最大量の部隊であるといふぐらゐにしか理解されてない面があり、小ブルジョアジーや自由主義的ブルジョアジーにきわめて近いところに傾斜している部分もあります。

日「共」宮本一派の場合は宮本の革命論の原点ともいえる「日本革命の展望」をみて、資本主義の賃金奴隸制としての批判（商品交換関係におよぶられた、生産手段の領有者への、労働の賃労働を通じた経済的隸従の関係）それと一体の、剩余労働の剩余価値としての搾取の批判やそこから導かれる社会主義、共産主義の目的、性格、資本主義に

封建地主制の打倒に基いてロシア農村共同体の復活とその社会主義的共同体への移行」を説いた農民社会主義的なロシア社会に対する革命観との、主としてマルクス「資本論」に立脚する資本主義批判を要とした激しい理論、思想闘争や、他方でのベルンシュタイン等に影響されたストルーベやブルガコフやツガンなどの合法マルクス主義のツァーベリズムとの闘い、「プロレタリアートの自然発生性が日露の関係そのものの廢絶」はただ外部からのみもたらされる」という有名な「何をなすべきか」の組織路線などに基礎づけられています。このようなレーニンの思想は「ロシア資本主義の発達」「軍事的封建的二重帝国主義」「ロシアの農業における資本主義發展の二つの道」「帝国主義論」やこれに応する「二つの戦術」「二重権力について」として展開されています。この点で貴兄も指摘されるようにエルフエルト綱領の最大限一最小限綱領の構成を支持したが、プロレタリア・ヘゲモニーを守っています。

* 日本における理解の現状

占めるプロレタリアートの地位、能力、資本主義が必然的に社会主義を導くこと、そこに到る段取りや方法、手段などの科学的社会主義の原則綱領（最大限綱領の部分）はなにひとつとして展開されていません。当時の春日氏等構造改革派が政治路線の面のみならず、日帝復活―社会主義革命を主張しつつ、プロレタリア革命の原則綱領の部分、つまり思想問題のレベルで修正主義に転落していくのに対し、この摘発、批判は何ひとつやれていず、対米従属と反帝反独占民族民主主義の政治路線上の革命を対置するのみであり、さらにはこつそりと「権力の階級から階級への移動は敵の出方による」として「暴力革命唯一論批判」と称する別の修正主義を対置しています。この修正主義は五一一年綱領と徳田球一同志等の革命的闘いを清算し、フルシチヨフに呼応したところから生じた点で政治路線そのものでも誤りがあるわけです。

いずれにしても、修正主義者は勿論、毛派にしても、「社会主義革命」を標榜する新左翼トロツキズムにしても、マルクスの「資本論」に代表される資本主義の一般的批判がほとんど理解されておらず、レーニンのプロレタリア・ヘゲモニーのもとでの二段階戦略の思想がほとんど復活されていないのが現状です。最近「民主主義革命から社会主義革命へ」の「发展転化論」の主張が積極的ななされ、レ

ーニンの引用などがなされていますが（これは基本的には正しいが）賃金奴隸制（生産手段の所有者への賃労働を通じた経済的隸従）批判を要にして、自由主義ブルジョアジー（や小ブルジョアジー）に対しプロレタリアートの階級的独立性を守る思想闘争の問題が欠落し、それゆえ主張が形式、形態論議に流されており、トロツキズム批判を農民との同盟の無視にすえていますが、トロツキズムが正しい政治路線ばかりでなく、マルクスの資本主義批判を軸とする正しい思想路線ももっていず、社会主義革命と民主主義革命（民主主義のための闘争）の関連がわからず「プロレタリア階級独裁」を主張しつつも実際にはプロレタリアートと結合されていない点が理解されていない。

＊ レーニンの著作から

私のこのようなレーニン理解が手前勝手でないことを証明するため、若干レーニンを引用しておきます。

「ロシア社会民主労働党は今日の農民運動をもつとも精力的に支持し、農民の状態を改善しうるあらゆる革命の方策を主張し、この目的のために地主の土地の奪取をも辞さない。そのさい、プロレタリアートの階級政党であるロシア社会民主労働党は農村プロレタリアートを独自の階級として組織することにたゆみなくつとめ、彼

ジョアジーであっても、それにたいするプロレタリアートの社会主義をめざす階級闘争がさけられないことを決してかたときもわすれてはならない。……このことから結論されることは、別個の、独自の、厳密に階級的な社会民主主義党がどうしても必要だということである。
……専制との闘争は社会主義者の一時的で過渡的な任務であるが、いやしくもこの任務を無視したり軽視したりすることは社会主義を裏切り、反動に奉仕するのに等しい。……」（「民主主義革命における社会民主党の二つの戦術」）

レーニンは民主主義革命における専制・地主に対する

「なぜなら、われわれは民主主義革命からただちに社会主義革命に移行しはじめる、しかもまさにわれわれの力に応じて、自覚した、組織されたプロレタリアートの力に応じて移行しはじめるだろうからである。われわれは永続革命を支持する。われわれは中途でたちどまりはないであろう（「農民運動にたいする社会民主党の態度」）

そして、このような革命の段階性と連續性（つまり、革命の民主主義革命としての性格と副次面としての社会主義革命の性格の二重化、将来における前者の後者への発展転化）の矛盾を統一するものとして

「われわれは自分の綱領のなかでも戦術においても、資本主義にたいする純粹にプロレタリア的な闘争を農奴制にたいする一般民主主義的な（そして全農民的な）闘争と結びつけなければならない」

「純粹にプロレタリア的な闘争を全農民的な闘争と結びつけるのであって、この両者を混同するのではない。一般的民主主義的、全農民的な闘争を支持するのであって、

らの利害が農民ブルジョアジーの利害と敵対的であることを農村プロレタリアートに説明し、ブルジョア社会全体にたいする農村および都市のプロレタリアートの共同闘争だけが社会主義革命に導くことができ、この社会主義革命だけが貧農の全大衆を貧困と搾取から真に解放できるということを彼らに説明する任務を一瞬もわすれないであろう」（「ロシア社会民主労働党第三回大会」）

六、農民運動の支持にかんする決議についての報告】）

「もちろん具体的な歴史的事実のもとでは過去の要素と未来の要素はからみあい、一方の道は他方の道とたがいに交わりあう。賃労働と私的所有に対する賃労働の闘争は専制のもとである。賃労働は農奴制度のもとでも生れる。しかし、それだからといって我々が大きな発展段階を歴史的に区別できないということには決してならない。我々はみな、ブルジョア革命に社会主義革命を主張しているのではないか。だが、一体、歴史のうえでは二つの変革の個々の部分的因素がたがいにからみあうことを否定できるだろうか。ヨーロッペの民主主義革命の時代にいくつかの社会主義運動や社会主義的な企図がなかつただろうか？社会民主主義者はどんなに民主主義的で共和主義的なブルジョアジーと小ブル

けつしてこの非階級的闘争に融合するのではなく、けつして社会化などといった欺瞞的な言葉によつてこの闘争を理想化してはならず、都市プロレタリアートをも農村・主義政党に組織することをかたときもけつしてわすれてはならない」（「小ブルジョア社会主義とプロレタリア社会主義」）のごとく最小限闘争の中での独自なプロレタリア・ヘゲモニーの形成の問題を力説しているわけです。このようないい・レーニンの民主主義革命（民主主義的闘争）と社会主義革命、最小限綱領のための闘いと最大限綱領のための闘いに対する考え方は首尾一貫しており、そのことは次の文でも明瞭です。

「民主主義のための闘争は、プロレタリアートを社会主義革命からそらせ、もしくはそれを妨害し、あいまいにする恐れがあるなどと考えるのは根本的な誤りであろう。反対に勝利をえた社会主義が完全な民主主義を実現しない、ということがありえないのと同様に、民主主義のための全面的な一貫した革命的闘争を行わないようなプロレタリアートはブルジョアジーに対する勝利の準備を整えることはできない」（「社会主義革命と民族自決権」）
「民族自決権ばかりでなく、政治的民主主義の根本的諸要求が帝国主義のもとで『実現可能』なのは、不完全な

かたわにされた形でにすぎず、またまれな例外としてにすぎない。あらゆる革命的な社会民主主義者が提出している植民地の即時解放の要求もまた資本主義のもとでは一連の革命なしにはやはり『実現不可能』である。しかし、だからといって社会民主主義者がこれすべての要求のための、即時の、もつとも断固たる闘争を放棄することには決してならない……まさにその反対に、すべてのこれらの要求を改良主義的でなしに、革命的に定式化し実行することが必要となるのである。……一切の根本的民主主義的要求のための闘争をブルジョアジーに対するプロレタリアートの直接の攻撃にまで、すなわちブルジョアジーを奪取する社会主義革命にまで拡大、激成しなければならない。」（同前）「離婚の権利は例外なくすべての民主主義的权利と同じように資本主義のもとでは実現困難で、条件的で、制限されるか、形式に偏っているが、しかしそれにもかかわらず、一人前の社会民主主義者ならだれでもこの権利を否定する人々を社会民主主義者とはみなさず、民主主義者ともみなさない」

「プロレタリアートは民主主義のための闘争によって社会主義革命への準備をすることなしにはこの革命を遂行しえない」（「マルクス主義の漫画および『帝国主義的経済主義』について」）

このように、レーニンは一方で資本主義のもとでの民主主義の欺瞞性、形式性、根本的実現不可能性を主張しつつもにもかかわらずこの最小限の闘争がプロレタリア社会主義革命を準備する点で前提条件になること、「ブルジョア民主主義の実現がブルジョアジーとプロレタリアートの階級闘争を純粹な形で現わす」という意味でのこの闘争を評価している。他方では資本主義のもとでの民主主義の本性からして、それが絶対的なものではなく「一般民主主義的（今では一般社会主義的な）世界運動の小部分として、個々の具体的な場合には部分が全体に矛盾することがありうることを主張する。

この引用で確認できることは、民主主義革命と社会主義革命の関連については段階性をはつきり確認し、そのうえで連続性的条件を民主主義革命の中で独自に作ること。民主主義闘争はブルジョア民主主義革命が実現されていよいまいと、プロレタリア革命を勝利させるには、それが欺瞞的で限界のある存在でも重視し、ブルジョアジーからのヘゲモニーを奪いとり、利用しなければならない。民主主義革命や民主主義のための闘争をぬきに、これを前提せず、社会主義革命や社会主義のための闘争を組織せんとするのは錯誤であること。結局「純粹なプロレタリア的闘争（社会主義のための闘争）を一般民主主義のための闘争と結び

つけ」民主主義闘争を闘い、民主主義闘争の中で独自に、目的意識的に社会主義のための闘いを組織してゆくこと、このことだと思います。ここで、ロシア革命のように民主主義革命を終えていない革命の民主主義綱領は、たとえそれが革命闘争によって実現されようと、社会主義革命からみれば資本主義のもとで実現される最小限綱領であり、資本制社会での一般民主主義の最小限闘争とその階級的質においてはなんら変らない、違うのは、前者がそれを実現するには、その権力を外国の帝国主義者が封建地主階級が握つているがゆえに権力奪取の革命闘争が必要であり、後者の場合は資本主義のもとでかならずしも革命闘争を経なくても実現されるということを指摘しておきます。米国やフランス、ソ連は民主主義革命を終えているから、また、外國帝国主義によって支配されていないから、このような国では革命の性質は社会主義革命であり、革命の戦略・戦術として民主主義を重視する必要があることから、非独占資本や富農をプロレタリアート・貧農の一時的同盟軍とする人民民主主義革命は考えられるが、これはその本質的性格において社会主義革命といえます。私は、日本や西独、カナダなどは高度に発達した国家独占資本主義国でありながら米帝国主義に支配され、従属し、日本の場合はそれに加えて米帝に結託した天皇制反動勢力が権力を握っているわ

けで、これらの国では独占資本の生産手段の没収、あるいはこの革命に反対する資本や富農の生産手段を没収すると、いう点で広範な社会主義的課題もあわせもつた民族民主主義革命になると考へています。（なお、人民民主主義革命というのはその語義がはつきりせず、便利な言葉ですが革命の段階性をボカス折衷主義的概念です）このような民族民主主義革命は売国的反動的独占資本の没収をはかるという点がふくまれてることなど米、仏、ソの社会主義革命としての人民民主主義革命と共通性も随分とあるといえます。人民民主主義革命を一応社会主義革命の戦略・戦術と考えるならばですが。

ちょっと話が日本の政治路線の問題にとんだりしましたが、貴兄方が「社会主義革命を広範に含む、これに連続する民族民主主義革命」というところをとつてきて「トロツキー的永続革命論をふくんでいる」と誤解したのではないかと思って説明しておいたわけです。いずれにしても我々の革命路線からトロツキー的永続革命論の危惧がとびだしてくるとはいえないのです。トロツキー的永続革命論をもつっているのはまぎれもなく新左翼トロツキズムやブンド系毛派であり、あるいは毛派の「社会主義革命論」を展開してゆかんとする部分です。トロツキーは、正しい資本主義批判を獲得している水準から導かれる民主主義闘争や民主

主義革命を重視する思想をもつていて、これを軽視しその戦術急進主義的展開だけは主張するが、民主主義革命（闘争）が社会主義革命の前提条件となることを理解できず、一般民主主義闘争に社会主義革命のための闘いを、資本主義批判を要とするマルクス主義の運用によつて結びつけ、民主主義革命（民主主義闘争）の中で社会主義革命を独自に準備してゆくこと、つまり民主主義革命（闘争）におけるプロレタリア・ヘゲモニーを培う思想を理解していないから民主主義革命も社会主義革命も闘えず、農民ばかりでなくプロレタリアートの支持も獲得できません。

* 約領について

なお、このようなレーニンの思想はマルクスの「共産党宣言」の原則綱領とその次の各国の各國毎の革命の性格規定の構成でもあきらかであり、「ドイツにおける共产党の要求」「一八五〇年三月の中央委員会から同盟へのよびかけ」「ドイツ農民戦争」の継承発展であることは明瞭です。また毛沢東主席の「中国革命と中国共産党」（毛選第二巻）の第五節「中国革命の性質」における「新民主主義革命論」や第六節の「中国革命の前途」第七節「中国革命の二重の任務と中国共産党」で極めて鮮明にうけつがれています。レーニンやボルシェヴィキの綱領は「プロレ

タリア・ヘゲモニーのもとでの二段階戦略」をはつきりさせるものとして、最初に資本主義の一般的批判―社会主義の規定とその革命の性質、プロレタリア階級独裁の意義等が展開され、これをふまえ、ロシア革命における民主主義革命の本性規定と任務が展開されています。「共産党宣言」やボルシェヴィキ綱領のように原則綱領が書かれていないとプロレタリア・ヘゲモニーの問題が理解されにくく、政治路線の展開だけではブルジョア・小ブルジョア思想を流入させるからです。原則綱領と革命の本性規定は基本政治路線をふまえて当面の小段階の政治路線と任務や諸政策といった構成順序で綱領と基本文書が書かれるべきだと思っています。もともと原則綱領を書いたとしても、それを実行しないのであれば意味がないが、しかしプロレタリア党の綱領に原則綱領が必要であることは至明です。

* スターリンとトロツキーの折衷ではありえない

第一、私はトロツキーを批判し、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想の見地にたつており、日本の場合は、「民族民主主義革命から社会主義革命へ」という二段階戦略の立場にたつており、当面の革命の基本性質が民主主義革命であることをあいまいにして、レーニンがやつたとなじように、民主主義革命、民主主義闘争においてソ米霸権主義と天皇制勢力、および売国反動独占に対し小ブルジョアジー（特に農民）や自由主義的ブルジョアジーと共に闘いつつも、独自にこれらの階級に対しマルクスの資本主義批判にもとづいて闘争し、社会主義革命の闘いと、プロレタリア党建設の闘いを推進しようとしています。

(三) 当面する革命の性格をめぐる論争はマルクス主義の立場・観点・方法、戦後革命の総括、日本社会の客観的実際を正しくつかむか否かの検証である

さて、以上をふまえて、常盤君の論点について反論しま

ここには、民主主義革命をとびこえたり、これを一気に社会主義革命に「永続」させようとするトロツキー的見地は全くないし、折衷主義が入りこむ余地はありません。貴兄が私に「トロツキー永続革命論とスターリン二段階戦略を折衷しようとしている」と主張されるのであれば、まず貴兄は、私が革命の連續性の名のもとに段階性を否定する

一段階社会主義革命論者であることを論証し、かつ、民主主義闘争を軽視し、資本主義批判もプロレタリア・ヘゲモニーの涵養の意図もないことを論証しなければなりません。これを貴兄は論証していません。むしろ、トロツキー的永続革命論の見地に近いのは、現在のブント系毛派や、新左翼トロツキズム程とはいしませんが、社会主義革命論を主張されても民主主義闘争の意義づけや、資本主義批判に立脚するプロレタリア・ヘゲモニーの問題が鮮明に意識化しきれていない貴兄方のほうではないですか。

なお、私は「スターインの二段階戦略」という批判に關しては、必ずしも、これまで（旧プロ革當時）のように、スターインにプロレタリア・ヘゲモニーがぬけていいるとは考えていました。（確かに資本主義批判が不十分ではある）七対三の割で偉大なマルクス主義者と考えているので、若干不本意ですがこの点は光榮に考へています。

* プロレタリアの階級的独自性

第二、貴兄は「革命発展段階論と連続革命の統一」を「思想方法」とされてますが、この名称に関しても基本的には賛成です。また形式的な特徴の規定に關しても賛成ですが、しかし問題はこの「統一」の内容だと思います。この内容の核心は、農民等ブルジョアジーや小ブルジョアジー、自

由主義的ブルジョアジー等進歩的側面（民主主義革命において）をもつた部分に対し共闘しつつも、他方では、この小ブルジョア性、自由主義性（私的所有の防衛）に融解することなく、独自にこれと闘争を堅持し、發展させることだと思います。つまり、レーニンの「階級的独自性」であり、毛沢東主席の「統一戦線における独立自主」「闘争もすれば連合もする」という思想だと思います。そして、そのまた核心は毛主席の「矛盾論」や資本主義批判を要とするマルクス主義の階級的科学的世界觀とプロレタリア党建設の思想だと思います。この点があれば、小ブルジョア社会主義の「左」のブレや、右の修正主義的腐敗も克服できます。私達の革命路線は「段階性と連続性の矛盾の統一」を資本主義批判を要とするプロレタリア・ヘゲモニーで果さんとしています。この点では「トロツキーとスターインを足して二で割る」といった機械的折衷論ではないことは理解してもらえるでしょう。この点で、ひるがえって、貴兄方が原則綱領の部分を開いていないのが気にかかったのです。あるいは「レーニン的二段階戦略」といったのに、この段階に対しどちらかといえば無視し連続性のみを強調する点でひつかかれたわけです。貴兄方は「革命の発展段階論と連続性の統一」を主張されるが、その実質は段階性を否定し連続性のみを主張し、そのことによつて客観的

に存在する段階性を清算する折衷論を開いているといえます。つまり、貴兄方がトロツキー永続革命論をその核心において批判しているのかということです。

* なるほど、私はトロツキー永続革命論的な小ブル

ジョア急進民主主義の「左」翼日和見主義の誤りを犯してきました。そして、連合赤軍問題でその総括を思想問題（階級性と対象の科学的認識方法）にすえ、総括の第一段階をやつたわけですが、そして、小ブルジョア急進民主主義性の克服の第一条件はマルクスの資本主義批判の獲得であり、これは一応獲得しましたが、しかしこの獲得した地平にたつとそれだけでは不十分で、獲得したプロレタリアートの階級的世界觀をもつてプロレタリア・人民大衆に結合するには、大衆の自然発生的に存在する民主主義と民族における契機と結合するには、その結合の中で階級的契機をくみつくすには、民主主義革命（民主主義闘争）と社会主義革命の関連をはつきりさせなければならないこと、そのためには、この問題の理論的歴史的整理と同時にその具体的適用としての日本社会とその権力の分析にもとづく正しい政治路線の獲得の問題がいぜん解決してないことを理解したわけです。

* 右の修正主義に「左」の 修正主義を対置した新左翼

ブント等新左翼トロツキズムの誤りは、戦後革命の敗北の総括に對して、フルシチヨフに呼應しつつ宮本一派がプロレタリア革命の原則綱領の部分の修正と、政治路線における折衷主義的二段階路線による歪曲をやり、逃亡をはかつたのに対し、この修正主義、小ブルジョア的日和見性を摘発しつつも日本社会と権力の正しい把握ができず、マルクス・レーニン主義を復権し毛沢東思想を支持しレーニン主義を批判し、プロレタリア階級独裁・社会主義革命の革命路線をプロレタリアートのヘゲモニーとして樹立し、逆に、修正主義に汚された二段階戦略を粉碎できず、つまり、修正主義を批判し、プロレタリア階級独裁・社会主義革命の革命論の小ブルジョア急進民主主義の社会主義革命論にのりうつたことがあります。また、この政治路線、思想路線は、コミニテルンの歴史との関連で考へれば、コミニテルン第六回大会の民族的契機や民主主義的契機を排除する純「階級対階級」論や「第三期論」「社会ファシズム論」の枠組みのなかにあつたと考へます。ここにおいて小ブル

ジョア「左」翼日和見主義が新左翼として固定化されたと捉えたわけです。この清算には小ブルジョア急進民主主義性の清算はありえないこと。結局新左翼は、日「共」

宮本一派の修正主義の二段階戦略、修正主義の第七回大会路線に對して小ブルジョア急進主義的に反発しただけであり、この修正主義に對してマルクス・レーニン主義をその資本主義批判の復権を要に復権し、修正主義に汚され死にかかっている二段階戦略、コミニテルン第七回大会路線（とりわけ中国党的抗日統一戦線）を浄化、蘇生させることはやりきれなかつたこと。しかし、闘いの熱意と闘争意欲は未熟性に反比例してあつたがゆえに日「共」から分離の

闘いを開始し、六〇年安保闘争を開いた。第一次ブントは六〇年安保闘争を闘い、その思想的危機を反スターマルクス主義とトロツキズムに純化し糊塗せんとしました。第二次ブントはいくらかマルクス・レーニン主義、毛沢東思想に接近し（第一次ブントのある部分はそれ以前に毛沢東思想に接近している）七〇年安保大会戦を開い、連合赤軍問題で小ブル急進主義の頂点に登りつめることによって、その小ブルジョア急進民主主義性の革命的清算の旅についたこと。ここでもって決定的に「一が分かれて二になつた」わけです。そして、旧プロ革派の解散をとうしてトロツキズムを革命的に清算し、マルクス・レーニン主義、毛沢東思

想にたちきつたと自負しています。この思想的軌跡は私の一貫した流れであり、別に現象的に「左」から右に転換したこと気にしていません。真の左とは客觀に主觀がピッタリあつて、常盤君達が私に對して「スターリン的二段階戦略への後退、『左』から今度は右へブレ」たと危惧するのであれば、まず、私がプロレタリア・ヘゲモニーをぬきにしようとしているか、あるいは貴兄達自身の新左翼総括をだし、スターリンに對する総括をだして新左翼トロツキズム総括をかみあわせてみる必要を感じます。

＊ 毛派の闘いの意義と問題点

日本の毛派も新左翼トロツキズムとは別の経路をたどつて日「共」修正主義との闘争を開始しましたが、私のみるところ、毛派もまた一といつて新左翼にくらべてその実践力はともあれ、原則的であつたと思われるが一宮本一派に對して小ブルジョア急進主義的批判はやつたが、原則綱領原則的資本主義批判のレベルではやりきれて、正しい対象把握にもとづく二段階戦略の意義を革命的に復権するには至らず、むしろ、新左翼トロツキズムに溶解され、ひきずられ、混乱してゆく面をもつていたと思います。毛派がなきねばならなかつたのは、新左翼からの批判を副次的放の課題や民主主義の課題（農民や自由主義ブルジョアジー等との）を接木した印象が強く、この革命路線はいずれ民族解放の課題や民主主義の課題を切り切るか有名無実化する「革命的祖国敗北主義—アジア侵略・帝国主義戦争を内乱へ」を主張する路線と、トロツキズム的社会主義革命論を清算し、今は副次面としてある反霸權民族民主主義革命を純化してゆく路線にかならず分化してゆくと思います。その原因については次の日本社会と権力分析のところで対象分析の折衷主義を通しても摘要してみせますが（いわゆる四つの対外矛盾と対内矛盾の設定が間違い。この関連が全く混乱し、機械的になつてゐること。これは、対ソ民族矛盾が主要矛盾となつても内在的に転換を説明しきれない論理構造になつてます）それ以前に、貴兄方が新左翼トロツキズムの社会主義革命論を正しく清算しきれていず

トロツキズムとレーニン的二段階戦略や毛沢東思想の民族民主主義革命路線（抗日統一戦線戦術）を折衷すれば必ずこうならざるをえないことを意味しています。それ故、貴兄方にはトロツキズム社会主義革命路線を革命的に清算することを強く訴えておきます。貴兄方は、ちょうど、旧プロ革派がトロツキズムと毛沢東思想を折衷しようとした志向を、より民族的課題や民主主義的課題をおしだすことによつて折衷し、踏襲しようとしています。しかし、その

＊ 一挙的プロ独・社会主義論と反霸權・民族的契機の重視とはかならず分化します

率直にいって、私からみますと貴兄方の革命路線こそ、「トロツキーとスターリンを足して二で割つて」といはいいませんが、新左翼トロツキズムの「社会主義革命」路線とプロレタリア・ヘゲモニーぬきの「反独占人民民主主義革命」路線が折衷されている印象をうけてなりません。新左翼トロツキズムの社会主義革命路線に機械的に民族解

率直にいって、私からみますと貴兄方の革命路線こそ、「トロツキーとスターリンを足して二で割つて」といはいいませんが、新左翼トロツキズムの「社会主義革命」路線とプロレタリア・ヘゲモニーぬきの「反独占人民民主主義革命」路線が折衷されている印象をうけてなりません。新左翼トロツキズムの社会主義革命路線に機械的に民族解

トロツキズムの根元を清算しきれてないがゆえに私達と同じ問題に逢着します。

第三次ブント再建を演出しているブント系毛派の諸君は、貴兄方以上に折衷主義で混乱が累積していますが、これらの人々はからうじて、小ブルジョア急進民主主義の克服、その要としての原則的資本主義批判の獲得と組織規律でもたせていますが、こんな主観的努力は、私はもつときついレベルでやつた一政治路線がまちがっている以上、徹底して召還しきる以外に分解は必至です。残念なことにせつかく獲得した資本主義批判の成果が正しく上向され、正しい政治路線の獲得にいたつていらないからなざらしになっています。

以上、これまでの展開を整理してみると、貴兄達は「革命發展段階論と連続革命の統一」を主張されつつも、その段階性の厳然たる存在とそのなかでの連續性の要素の関連や、これを媒介する統一戦線と階級的独立性、その要としてのマルクス主義資本主義批判にもとづくプロレタリア・ヘゲモニー建設の問題があいまいで、実質は段階性の存在を軽視ないしは無視し、段階性を一気にとびこえる形での「連續性」の強調などの主觀主義、折衷主義の傾向にあること。「連續性」とその主觀的要素を強調し、いかなる革命も社会主義革命であるかのごとき論理性や思想性を排

* 戦後革命は勝利したのか、敗北したのか

。「反帝反独占民族民主主義革命」という革命の性質規定の概念については、厳密には「反帝・反天皇・反売国反動独占資本打倒の民族民主主義革命」を意味し、宮本一派の天皇制的土地独占や、天皇制との闘いをぬかした反米帝民族革命とこれと無媒介な構造改革的反独占民主主義革命とが「二つの敵」として併存されているような折衷主義の「反帝反独占民族民主主義革命」とは根本的に異なっています。宮本一派のこの「革命路線」は後でものべますが、戦後革命（とりわけ五一年綱領とその闘い）を清算するためには「天皇制との闘いは革命の重要な課題ではなくなった」なる論拠を出発点に築かれたものです。

。常盤君は「人民権力の樹立までにはゆき得なかつた点で敗北ですが、と同時に自由民権運動以来のブルジョア民主主義革命の任務は、ほぼ基本的に達成した点で極めて大きな成果をあげたこともまた事実です。」「絶対主義的半封建制を解体し、民主主義改革を実現した眞の力は決して米帝占領権力にあつたのではなくて、徳田球一同志をはじめとする当時の日本共産党の指導した人民民主主義革命にあつたと考えます」と述べています。この二つの主張が貴兄の戦後革命の視点になつています。とりわけ最初の主張

(四) 戦後新民主主義革命、その段階性と連續性をいかにとらえるか

——米帝国主義・天皇制絶対主義勢力・人民の間の諸矛盾

を正しく分析しよう

私の日本社会やその権力に対する把握は前便でふれていますので、ここでは戦後革命の総括を軸に歴史的に必要な論点にふれていくことにします。貴兄との論争は戦後革命の総括をかみあわせると論点がスッキリし、現状の対象規定やその他もスッキリします。

しかし、私から言わせますと、貴兄は一方では「革命は敗北した」とい、他方では「ブルジョア民主主義的課題の任務はほぼ達成した」とい、達成したのであれば革命は勝利している、矛盾した折衷主義的言い方になつてゐること。敗北したのであれば「ブルジョア民主主義の課題の主側面は実現されなかつた（農地改革をふくむブルジョア民主主義改革の主側面は反革命の欺瞞策だつた）」とすべきであり、ブルジョア民主主義の課題は実現されたのであれば「革命は勝利した。しかし、この革命に連続する次の社会主義革命の段階で敗北した」とか論理を一貫させるべきです。あなたは「人民権力を樹立しえなかつた点で敗北」と敗北に留保をつけているわけですが、このことは、ロシア二月革命のごとき「労働者・農民の革命的民主主義的独裁」や、中国の「連合独裁権力」が樹立されるほどにはゆかなかつたが、ともかくにも「絶対主義天皇制勢力は打倒され、ブルジョアジーに権力が移行した」といつているのですか。それとも、一九〇五年のロシア革命のように「基本的には敗北し、ブルジョアジーは一定の地位を上昇させたものの、それにもかかわらずツァーに従属・寄生し、農民の地主やツァーに対する矛盾は、農民革命の爆発を逆手にとって、地主が資本家化したり極小零細農をつくる方

向で、農業・農村を反動的なブルジョア的農業改革でもつて解決すること終了させた」のごくいろいろののですか。貴兄方の紙面全般の主張をみれば明らかに前者になります。要するに、「革命は不徹底だが勝利した」のか「かなり前進したが革命は不徹底で敗北した」のかいずれなのですか。占領軍は最初人民の天皇制打倒を援助したことになるわけですか。そして、それが民主主義革命の枠をでようとした時反革命にてたというわけですか。これも確かにひとつの側面を反映する主張ではあります。貴兄は改革の推進力が人民にあったことを主張されます。なるほど、まったくその通りです。しかし、これとは別に、これをうわまわる米帝権力が存在し、この推進力を自己の階級的意図のために利用し、ネジまげ、棒をはめたことを忘れてます。貴兄は、人民が改革の推進力であったことと、これをうわまわる米帝権力が自己の階級的利益のためにネジまげ利用したこととを混同してませんか。たとえ、貴兄のいうとおりだとしても、権力についたブルジョアジーが米帝に支配され従属している以上人民の民主主義は制限、剝奪されるわけですから、宮本流の「反帝反独占の民族民主主義革命」となり、社会主義革命にならないのではありませんか。

貴兄の主張は、若干図式的にいへば「四五〇四七・八

るをえなかつた。この限りでは、日本人にとっては、米帝は解放軍に映つたし、実際そういう面をもつていてのこと。そして、ひとたびこの目的を果した段階で反ファシズム連合が決裂し、国際的には、ソ・中等国際革命勢力と米帝等国際帝国主義勢力との対決、国内では、米帝・売国天皇制・売国反動独占と人民との対決が主要な矛盾にあがつてき、米帝が反革命の本性を露わにしたと思ひます。

天皇制勢力やこれに寄生する独占資本は、対米帝国主義と対人民の二つの大きな矛盾をもつていて、それゆえ両面から打撃を受ける位置にあつたが、反共・反人民・反革命であるがゆえに喜んで売国の道を選び、その限りで、その見返りとして天皇制の基本的防衛を米帝からとりつけつ、米帝の占領支配のための「ブルジョア的改革」を受け入れたわけです。米帝国主義は、最初から天皇制護持をめざしていたが、その対米従属・支配体制をつくるための具体的再編成の動きがダイナミックであつたために人民にとつては「大きな改革」に見え「米軍が解放軍」に映つたわけです。

○また、日本共产党を牽引軸とする天皇制打倒の民主主義革命のヘゲモニーが反ファシズム連合の中で急速に再建され、育つていったことは確かですが、しかしこのヘゲモニーは、米帝に伍して民主主義革命を徹底的に推進し、米

年、民主主義革命の不徹底な勝利。その後五〇年を前後にして、米帝の反革命の中で社会主義革命に連続せず、鎮圧された」こうなるのではないですか。

しかし、米帝に支配されている以上対米民族矛盾が主要矛盾となり、資本と貢労（あるいは独占資本と人民の矛盾）は次要の矛盾ですし、民族民主主義革命とするのが常識と思ひます。一九〇五年のロシア革命ではソヴェト権力まで生み出ましたが、レーニンは「不徹底だが民主主義革命は勝利した」とはいってません。

私も四五〇四七・八年頃とそれ以降の米帝の対応には大きな変化があつたことを認めるのですが、しかし、米帝の首尾一貫した戦略は反共反人民反革命であり、反ファシズム連合があつた時でも首尾一貫しており、ただ、米帝にとっての主要な矛盾は、日本天皇制絶対主義権力を解体・再編成し、これを米帝体制に経済的政治的に従属・繫留せんとすることにともなうものであり、米帝対天皇制軍事封建帝国主義との矛盾が主矛盾として尾をひき、そのためには當時にあつてはたいしたことはなかつた天皇制への打撃のために人民勢力を利用したものと思ひます。

米帝は、日本天皇制絶対主義権力を打倒しその対米敵性をぬきとり、自己に屈服、従属させ、日本を米帝体制に従属性に繫留するために一連の「ブルジョア改革」をやらざ

帝を駆逐し、社会主義革命に連続的に転化したりする力量はもつていず、徳田球一同志等の奮闘はあれ、きわめて、自然発生的性質であり、中国共产党のごとく日本軍国主義打倒の最終的過程で国民党と米帝との内戦を開けてゆける準備を完了していけるような能力とはくらべようもなく、伊や仏の共产党ほどの反ファシズム・レヂスタンスや対独解放戦、あるいは東欧諸国の反ファシズム解放戦争・民主主義革命などの武装闘争をも経験していない、強力なものとは言えませんでした。この意味できわめて自然発生的な域をでていなかつたといわざるをえません。また、ブルジョアジーに関する動きですが、天皇制絶対主義権力に反対する独占資本を中心とする独自の政党が戦後直後に存在していたとはいえず、すべてが絶対主義天皇制官僚の戦後処理内閣によつて処理されており、資本家のなかから立憲君主制に改革する提案すらなされず、ひたすら天皇制護持の動きしかみせてません。

この自然発生的性質は、四七年米帝の政令二〇一号攻撃による二・一ストの挫折、これを右旋回点とする国際国内情勢、コモンフォルムや中ソによる日本共产党の批判、日和見主義的国際権威追随の国際派分派の形成とこれへの所感派主流派の党内鬭争等を通じて五一年綱領を獲得するなかで除々に克服され、日本共产党は伊・仏共产党なみの水

準にきたえられて いっ て いるものと思 います。

五一年綱領をつくりあげる過程には、戦後第一次農地改革等「一連のブルジョア的改革」を過大評価し、その本質をみぬけず「天皇制的地主的土地所有は消滅し、天皇制は生産関係・制度としては消滅し、米帝支配のもとで新たに売国的反動的独占資本が形成され、農村では『解放された』小作や自作の中の一部が富農化し、この部分が米帝と独占の農村での代理人になつて いる」という主張がなされ「反帝反独占の民族民主主義革命」が主張される時期もあつたわけですが、米帝国主義の本質と占領政策の分析や農地改革の実態、農村調査がなされ、いぜんとして地主対全農民の矛盾が主矛盾であることがはつきりし、伊藤律などをはじめとしてブルジョア改革とストルイビン農業改革との共通性をとなえ、レーニンの「農業における資本主義の二つの発展の道」などの理解にもとづくその理論的把握も進展し、五一年綱領は「天皇制的地主的土地所有は消滅しておらず延命し、この天皇制官僚勢力を中核にし、いぜんとしてこれに従属しつつ独占資本が存在している」と主張し、一連の「ブルジョア改革」についての性格を明瞭にしてゆきます。

○確かに農地改革は農業用地の地主的土地所有を一応隸

つて不可欠であり、また米帝支配のもとでの人民支配に不可欠であり、天皇制・地主体制に従属した金融独占資本||財閥を米帝経済に従属させるためには「財閥解体」は不可欠であり、これらは人民民主主義のためではなく、その反革命のためであった。人間天皇宣言・象徴天皇制・皇室典範の廃止はこの日本の絶対主義天皇制の対米敵性をぬきとり米帝体制につなぎとめるための総しあげの頂点であった。しかし、米帝は解体・再編成はしたもののですべてを消滅させてはいはず、とりわけ四七、四八年以降は種々な形で意識的に復活をはかつていますし、なによりも、天皇制の経済的基礎たる大土地所有制を防衛し、土地革命が徹底化し拡大されたり、集団化してゆく動きは断固として反革命鎮圧の挙にでています。だから、日本農民は、国内的には天皇制によって、収奪・抑圧されているのであり、農業における資本主義発展はきわめて微弱で、上向分解はなく、下降分解し、半プロレタリア化、プロレタリア化してゆく方向が大勢であり、富農に中農や貧農が搾取・収奪されている矛盾はきわめて低く、貧農対産業資本家の矛盾の方が大きい。

五一年綱領を闘つた徳田同志等は朝鮮侵略反革命戦争の

農に「解放」しましたが、貴兄も確認されているように、日本の土地の八割にもあたる山林、原野は天皇制勢力にいぜん独占され、この大土地所有は人民収奪と、地主階級や天皇制官僚が金融資本を支配し、資本蓄積を果す基礎となつておらず、この点では、戦前からの資本蓄積構造は資本的地位、比重がたかまつても本質的には変つていません。旧地主の一部は富農化し、資本家化し、いぜん農漁村の支配階級のままであり、零細土地を与えられはしたもののお小作農や自作農が富農に上昇する条件はきわめて少なく、土地の買足しが土地の高価格ゆえ制限されている、「農業のアメリカ的発展」などは論外で、零細農は自作地を得たものの零細貧農にかわったにすぎず、しかも、小土地所有者になつたことによつて零細小農は決定的に保守化し、地主階級のブロックのなかにかかえこまれてしまい、革命の防波堤の役割をはたしました。そればかりでなく、この零細貧農化は国際規定力をもつた農業の資本主義化をきわめて限界あるものとどめ、日本人民の食料自給の道をとざし、日本の食料供給を米帝農業におおぐ農業経済構造をつくりあげてしまつた。

皇軍や天皇制警察や裁判所の解体は米帝の日本支配にと

終結にみられる情勢の転換に対し、一方では五一年綱領と武装闘争の闘いを防衛しつつ転換すること、他方では、そのためになによりもスターリンの死とフルシチヨフ修正主義集団の登場による戦前戦後の革命闘争の清算の大波と闘わねばならず、これは極めて困難なことであり、革命的労働者人民に権威をもつた徳田同志が死去するや、宮本一派がフルシチヨフに追随しつつ「極左妄動主義」「家父長主義」なるレッテルをはりつけ、地主的搾取関係の消失をもつて「封建的」「天皇制的土地所有や天皇制が人民の主要な敵ではなくなつた」という主張のもとに、敵を天皇制官僚勢力や売国反動独占や地主階級ではなく、天皇制勢力をかたわらにやつた米帝と独占資本一般にすえる、いわゆる「二つの敵」の反帝反独占民族民主主義革命を主張し、清算していくわけです。宮本一派は徳田球一同志に反発し、コマンドー批判がでるやこれにとびつき、所感派が革命的戦闘を新綱領の方向で推進するやこれに非協力で、結局、たんなる日和見主義の分派主義者であることを明瞭にしたが、戦後革命の革命的闘いを清算するために五一年綱領に反対し「反帝反独占民族民主主義革命」なる綱領をもちだしてきたわけです。

確かに絶対主義天皇制は、戦後の米帝の占領と革命の中で致命傷寸前の打撃をうけ、戦前のごとき絶対主義的権力

性は保持してはいるものの、その存続も一定の経済的基礎や権力構造や勢力をもち、いぜん、日本社会の権力の中核にあり、その戦後存続は米帝に売国した売国的延命形態であるものの、金融資本や独占資本の中核にすわり、その政治支配中枢ではあるものの、独占資本との関係も著しく後退的な関係にかわってきているものの、これを従え、そ

して、天皇制の経済的基礎は独占資本の発展によつてほりくずされている面もありますが、にもかかわらず天皇制的土地位を基礎にした天皇制官僚勢力や地主は、政治的に独占資本を従えているのであり、独占資本は米帝と天皇制勢力に従属・寄生しつつその資本主義的蓄積・再生産を維持しているといえます。決して、米帝とこれに従属する独占資本の中でかたわらにおしやられた一権力機構でもなければ、ブルジョア独裁の君主制形態でもないのです。寄生地主制とともに半封建的搾取関係は一応消滅したが、生産関係を決定する中心はなによりも生産手段の所有関係であり、搾取がなくなつても土地所有の半封建制が存続しておれば、半封建的収奪はいぜんその土地所有をもつて存続するわけであり、これを天皇制勢力が経済的基礎にして延命してゆくことは当然のことです。以上、半封建的搾取関係の消滅をもつて半封建土地所有や収奪、その勢力が消滅したとするのは早計なのです。

* 結局、戦後革命の敗北はいかに総括されるべきか

そのためには、戦後日本革命を段階性と連続性の関係で、つまり新しい型の民主主義革命の関連で整理しておくべきです。

戦後革命の段階が天皇制絶対主義社会とその権力に対する民主主義革命であったことは明瞭です。ただし、日本社会との権力の特性と階級関係からしてその指導的階級はブルジョアジーではなくプロレタリアートであり、プロレタリアートと農民（富農が入る）の、部分的には自由主義ブルジョアジーをふくむ徹底した土地革命の遂行を起動力とする革命的民主主義独裁であり、この革命は、他方で、天皇制絶対主義体制下で独占資本主義が発展し、これに伴つてブルジョアジーが革命性を失い、天皇制に寄生し反動化していたがゆえに、ブルジョアジーとともに民主主義革命アートと貧農の階級闘争が発展していった以上、天皇制官僚や地主、反動的寄生的な独占資本に対する労働者、農民や自由主義的進歩的ブルジョアジーとともに民主主義革命を展開してゆくと同時に、他方で、独自に資本制所有関係の廃絶をめざすプロレタリア階級独裁・社会主義革命のプロレタ

リア前衛党建設としてうちきたえる必要があり、決して、プロレタリアートを富農や自由主義ブルジョアジーの階級的立場にその立場、任務をおしさげたり、解消させたりしてはならなかつた。この民主主義革命における一個二重の推進が党建設として展開、実行されおれば、日本民主主義革命は徹底して展開され、労働者農民の革命的民主主義的独裁が創出され、それはプロレタリア社会主義革命に連続的に発展転化してゆく可能性を与えていた。しかしこのような主体的条件をもつて民主主義革命が闘われない場合、戦後革命期の世界は、すでに世界的には国際プロレタリア社会主義革命と国際ブルジョア反革命との闘争が自覚的に展開されている時代であり、日本大独占ブルジョアジーは革命性などまったくなく、天皇制に寄生し、米帝に従属し、反共・反人民・反革命を天皇制との対決よりも優先させるがゆえに、反動的なブルジョア改革をともなつた天皇制反動勢力の反革命が勝利する関係にあり、ブルジョア民主主義革命が天皇制、反動独占、米帝を打倒せずして中間主義的に勝利するなんてことはありえなかつた。

この革命は毛沢東選集第二巻の「中国革命と中国共産党」で展開されている新民主主義革命の見地でみれば、日本革命もまた以下の引用と基本的に同じである。

「現在の中国のブルジョア民主主義革命はもはや、時

代おくれになつた古い型の一般的なブルジョア民主主義革命ではなくて、新しい型の特殊なブルジョア民主主義革命である。……このような新民主主義革命は世界プロレタリア社会主義革命の一部分であり、帝国主義、すなわち国際資本主義と断固闘うものである。それは、政治的には、いくつかの革命的階級が連合して帝国主義者と民族裏切り者、反動派に対してもこなう革命であり、中国社会をブルジョア独裁の社会にすることに反対する。それは、経済的には、帝國主義者と民族裏切り者、反動派の大資本、大企業を没収して国家の經營に移し、地主階級の土地を分配し農民の所有に移すが、同時に、一般の私的資本主義企業は保持し、富農経済も消滅しない。したがつてこのような新しい型の民主主義革命は、一方では資本主義のために道をはききよめるが、他方では社会主義のために前提をつくりだすものである。……植民地・半植民地・半封建の社会を終結させ、社会主義社会を樹立するまでの一つの過渡的段階であり、新民主主義の過程である。……新民主主義革命とはプロレタリア階級の指導のもとにおける人民大衆の反帝・反封建の革命のことである。中国社会がさらに一歩すんで社会主義の社会に発展していくにはこの革命を経なければならず、そうしないかぎりそれは不可能である。このよう

第6節 P四四六一四四七)

な新民主主義革命は過去における欧米諸国の民主主義革命とは大いに異なっている。それはブルジョア階級の独裁をつくりあげるのではなくて、プロレタリア階級の指導のもとにおける革命的諸階級の統一戦線の独裁をつくりあげる…。プロレタリア階級の指導のもとにおけるいくつかの革命的階級が連合しておこなう独裁である。

(第5節 P四四二一四四三)

日本民主主義革命の前途との関連でみれば、

「(中国革命の前途は)中国の社会で資本主義が一定の程度まで発展することは、……経済のおくれている中国で民主主義革命の勝利後さけられない結果である。しかしこれは中国革命の結果の全部ではなく結果の一つの面にすぎない。中国革命の結果全体としては、一面では資本主義的要素の発展をみせ、もう一面では社会主義的要素の発展をみせる。この社会主義的要素とはなにか。それは、全国政治勢力のなかでプロレタリア階級と共産党の比重が増大することであり、農民、知識人、都市小ブルジョア階級がプロレタリア階級と共産党の指導権をすでに認めたか、あるいはそれを認める可能性があることであり、民主共和国の国営経済と勤労人民の協同組合経済である。これらはすべて社会主義的要素である」(

これは性質の異なる二つの革命の過程であり、まことにその過程を完結させないかぎりあとの革命の過程を完結できないことを知らなければならない。民主主義革命は社会主義革命の必要な準備であり、社会主義革命は民主主義革命の必然のすうせいである」(第7節 P四四七一四四八)

この点では、戦前・戦後の日本革命は根本的に全く同じである。

○日本ブルジョア民主主義革命は、一八六八年の明治維新をめぐる徳川幕藩体制から明治絶対王制への一大政治戦争の中にも萌芽的にふくまれており、副次面としての位置をしつつもこれをブルジョア民主主義革命の出発点といえないことはないが、基本的には自由民権運動の爆発からをその開始と位置づけるべきであろう。このにない手は農民や一部の自由主義的ブルジョアジーであり、プロレタリアートはまだ階級的・組織的に参加していない。しかし、この一部のブルジョアジーの革命は明治憲法制定の中で天皇制絶対主義権力に従属・寄生し、自分の権力を天皇制に補充代位し、ブルジョア民主主義革命の指導的階級として、地主・天皇制権力と対決してゆくことはしなかった。一九二二年共産党が結成されるまでプロレタリアートや農民は散發的に抵抗しているが、民主主義革命を指導する程には

この点では、日本革命は共産党とプロレタリアートの指導権があった場合は、ロシア革命の二月、十月革命のように資本主義が発展しプロレタリアートの比重が高くなっている以上、連続的に社会主義革命に転化し、それを維持する物質的経済的条件があり、中国のようない人民民主主義独裁の新民主主義社会の期間をごく短かくしてしまう可能性をもっていた。

「(中国革命の二重の任務と中国共産党)中国革命全体は二重の任務をもっていることがわかる。つまり、中国革命はブルジョア民主主義的性質の革命(新民主主義革命)とプロレタリア社会主義的性質の革命、現在の段階の革命と将来の段階の革命という二重の任務をもつてゐる。この二重の革命の任務にたいする指導はいずれも中国のプロレタリア政党―中国共産党の双肩にかかるのである。中国共産党の指導なしにはどのような革命も成功をおさめることができない。……現在の段階の民主主義革命の任務があるだけで、将来の段階の社会主義革命の任務はないと考えたり、現在の革命や土地革命は社会主義革命であると考えたりしているこれらの観点はあやまりである…。民主主義革命と社会主義革命という二つの段階をふくむ革命運動の全部であること、こ

プロレタリアートは成熟していらず、軍事的封建的帝国主義は日清、日露、第一次帝国主義戦争の三度の侵略戦争をして急速に成長していった。そして、経済的には第一次世界大戦前後で帝国主義段階に到達し近代都市プロレタリアートが形成され、政治的にはロシア十月革命の成功をもつて日本共産党が成立し、この段階で政商が財閥に発展した大金融独占ブルジョアジーは反共反革命の超反動として天皇制権力の主要なにない手の地位を定着させ、プロレタリアートはブルジョア民主主義革命を指導する地位をブルジョアジーにかわって占めざるをえなかつたし、それをひきうけた。この革命は経済的内容からすればブルジョア民主主義革命でありながら、世界プロレタリア社会主義革命の一環として、プロレタリアートが指導的階級となり、徹底した土地革命をふくみ、農民や都市小ブルジョアジーや一部の自由主義ブルジョアジーを連合させる新しい型の民主主義革命であった。

また、この革命の前途は社会主義革命であり、プロレタリアートと共産党が指導的地位を占め、反動独占や大企業を打倒しその生産手段を没収する点で、また、土地の国有化も、その国有化した土地を分配するも、協同組合農業に再編してゆく方向に軌道づけている点でもその中に社会主義的性質をふくむものであった点で、「二重の革命、二重

の性質」をもつていた。

段階性と連續性の関連でみれば、天皇制体制に対し「プロレタリアート・貧農は、全農民や自由主義ブルジョアジー・や都市小ブルジョアジーをひきつけ連合しつゝ闘い、他方では独自にプロレタリア政党を強化し、ブルジョアジーに対する社会主義革命・プロレタリア階級独裁を強化し「純プロレタリア的闘争と一般民主主義的闘争とを結合」させ、ブルジョア民主主義革命の質を新民主主義革命に改造し徹底してやりぬき、この貫徹を経てプロレタリア社会主義革命に発展転化してゆくことである。米帝が日本軍事封建帝国主義を打倒し、占領支配し、天皇制勢力が反共反人民反革命のために米帝に売国した段階で、ひきつづき中ソ国際プロレタリア革命勢力と結合し反米・反天皇・反売国反動の民主主義革命に形態転換し闘いぬくことであった。徳田球一、渡辺政之輔、市川正一、野呂栄太郎同志等戦前共産党は基本的にはこの新民主主義革命の方向で二七年、三二年テーゼを獲得し、天皇制絶対主義のファシズム攻撃に対決し、非転向を貫ぬき、徳田同志は日本軍事的封建的帝国主義の敗北の後出獄してただちに日本共産党を再建し、天皇制打倒の民主主義革命を開始した。この行動は革命的でありマルクス主義にもとづいたものであり、また、その路線は正しいものであつたことはいうまでもない。その闘

綱領と当時の闘いを防衛しつゝ國際国内情勢の転換に対応することをやりきれなかつたことである。また、この闘いを國際派に対する闘い以来の問題として徹底して逐行しきれなかつたことがあります。この点では毛主席や中国共産党すらフルシチョフに対して確固たる態度を示すのにはその後数年を要したように至難のことであり、徳田同志の国外亡命と死去の条件がこれに加わり、敗北せざるをえなかつたことである。したがつて、徳田共産党勢力の敗北の主体的総括は、宮本修正主義を、資本主義の賃金奴隸制批判・プロレタリア階級独裁・社会主義革命・プロレタリアートの階級的独立性||プロレタリア党の非合法中央集権党的問題として、一般的な國際權威追随主義批判ではなくて、フルシチョフに反対し毛沢東を支持することの弱さの問題であり、あるいは、その右翼清算主義||小ブルジョア自由主義・小ブルジョア民主主義に立脚した「反帝反独占民族民主主義革命」路線をあべきだすことであつた。

運動組織論的には、国際的国内的、獄中獄外をつらぬく非合法中央集権党建設を要にして、山村工作隊等の必要はあつたが、都市の労働者階級の民主主義闘争や、独自のプロレタリア階級独裁・社会主義に向けての組織化を基軸に貧農との同盟を軸にする労農同盟を創りだし、これとともに軍事路線を獲得していくことであつた。情勢の転換に際

いの力量、性質、成果を全般的にみれば、ボルシェヴィキ党や中国共産党あるいはユーロやアルバニア党的闘いにくらべれば自然発生的であり、イタリアやフランスなどの反ニン主義の修得にもとづく、考えぬかれていたえぬかれた思想政治路線や、國際国内情勢を適確に把握した戦術思想に不十分で、非合法党や國內階級戦争と建軍武闘の経験においても遜色があり、米帝占領軍に対峙しつゝ主動的に一定の連合をし、天皇制をソヴェト的な人民権力機関をつくり出して打倒し、アメリカ帝国主義とそれに屈服・従属した天皇制勢力に勝利し得なかつた。四七、四八年以降の路線転換と五一年綱領とその後の革命的闘争も正しかつたし、アメリカ帝国主義の朝鮮侵略反革命に対決し、中国・アジア大陸の革命を背後から支援する國際遊擊戦の役割りをはたした。問題は、徳田同志らの五一年綱領とその闘いに根本的な点で問題があつたのではなくて、国際的にはこの闘いを指導する地位にあつたスターリンが死去するなかで登場したフルシチョフ修正主義、これに国内的に呼応した宮本一派に対してこの札つき修正主義分子をあべきだし、整風し、

換言すれば、五一年綱領とその闘いを継承しまりぬき党がガッチャリ存在し、武装闘争路線を転換してもそれにもなつて基本政治路線や党の根本的骨格をかえ、清算主義をばつこさせないような党の氣風、作風を育てきれなかつたことである。

常盤君は「その後の内外情勢の変化、發展にたちおくれこの路線を継続的に發展させ、反帝反天皇反独占の路線を戦後相對的安定期でも徹底して推進し、新民主主義革命を合法路線を主としたものに転換して徹底して推進していくことであつた。

戦術・指導の転換に失敗し、五一年綱領は日本社会の急激な變化を反映することができず、「左」翼冒險主義的戦術方針の誤りを犯しました」とのべていますが、この「急激な變化」とはいつたいどういうことですか。また「『左』翼冒險主義」といいますがどの点が「左」翼冒險主義だったのですか、あるいはこの「左」翼冒險主義批判の内容は宮本一派の批判とどこがどのようにちがうのですか。

宮本一派は第八回大会で春日庄次郎氏ら構造改革派修正主義を駆逐し、十二回大会では志賀、神山氏らソ連派修正主義を駆逐し、十二回大会で毛沢東思想派を除名した。(毛沢東思想派が六全協で妥協し、徹底した反修正主義闘争を

やつてきたのか否かが検討されねばならない) 以降、宮本は修正主義を完成し、正式にプロレタリア階級独裁・社会主義革命の路線を放棄し「三つの世界」論の展開の中でソ連社会帝国主義の手先であることを明瞭にした。徳田共産党体制の解体化とフルシチヨフ・宮本の修正主義路線がばつこし、六全協が演じられ、七回大会、八回大会で修正主義が定着してしまった。この修正主義の党的乗つとりに対し、共産主義者同盟の前身は、その本質を直感的にとらえつつもプロレタリアートに依拠できず、これを綱領の原則的部 分 || 貸金奴隸制批判、プロレタリア階級独裁・社会主義革命の路線の放棄、(非合法) 中央集権のプロレタリア党建設の放棄、政治路線における右翼修正主義の清算主義に基づく折衷主義の「反帝反独占の民族民主主義革命路線」の批判としてレーニン的なプロレタリア・ヘゲモニー || 新民主主義革命の二段階戦略を防衛しつつ宮本をあばききれず、スターリン・毛沢東を批判し、コミニズムテルンと戦前・戦後直後の日本共産党の闘いを清算し、トロツキーを礼賛し、フルシチヨフ批判をあいまいにし、トロツキー流の観念論の小ブルジョア社会主義の「世界革命」と日本社会とその権力の歴史的特殊性を理解しないまま帝国主義論の機械的もちこみとしての日帝自立論ー小ブルジョア「社会主義革命」をもつて小ブルジョア学生層に依拠し、宮

本修正主義に小ブルジョア急進主義を対置し分離した。この分離は修正主義をあげた点で日本共産党再建の先駆ではあったが、それが非マルクス主義の小ブルジョア急進主義の立場であつた点で限界があつたといえる。

しかしブントは、観念論の形而上学の小ブルジョア社会主義のトロツキーや反スターマルクス主義に依存しつつも、唯物弁証法とマルクス・レーニン主義に立脚しようとする面を残しており、トロツキー教条主義、純正反帝反スターマルクスとの闘いを通してマルクス・レーニン主義・毛沢東思想と新民主主義革命の路線を樹立する可能性を、自らの小ブルジョア急進主義的出生を革命的にマルクス主義の立場から清算することを前提にもつていていた。

○以上をまとめてみますと、

- (1) 敗戦直後の日本社会には次の諸矛盾があつた。
 - ④ アメリカ帝国主義と天皇制絶対主義反動勢力
 - ⑤ 日本人民(労働者・農民、自由主義ブルジョアジーをふくむ)と天皇制反動勢力
 - ⑥ 日本人民とアメリカ帝国主義
 - ⑦ 資本と貧労労働
- (2) 四五・四七、四八年は④が主要矛盾で次要の矛盾として⑤があり、⑥の矛盾は反ファシズム連合で調節されてい

た。③はあつたが④⑤⑥に従属していた。四八年以降②の矛盾が後退し⑦の矛盾が主要矛盾となり、次要の矛盾として⑧が位置した。

アメリカ帝国主義は反共・反人民・反革命で天皇制護持をめざしたが、絶対主義天皇制勢力の対アメリカ敵性のぬきとり、解体再編支配をめぐる闘争が主要矛盾で、そのために一連の「ブルジョア改革」をやつた。それが人民には改革に映つたが、また、一定の改革でもあつたが、本質は反革命であつたこと。人民はアメリカ帝国主義と対天皇制ファシズムに対する反ファシズム連合をむすんでいたが、アメリカ帝国主義を逆規定するほどの主導権がなく、一定の成果もえたが、アメリカ帝国主義のしくんだ植民地支配、天皇制護持の枠組みをぐるものではなかつたこと。この段階で天皇制反動勢力から独占資本に国内権力が移動したことではない。

国際的国内的反ファシズム連合が破綻し、売国した天皇制とアメリカ帝国主義プロックと日本人民の矛盾が激化し、革命の性格は反天皇反反動独占の民主主義革命から反アメリカ反天皇反独占の民族民主主義革命に変化したこと。

戦後共産党はこれを闘い、第二次農地改革、朝鮮戦争の終結等の成果をおさめたが革命が実現するまでには到

らず、その成果を、闘争の終結過程でフルシチヨフ・宮本連合に清算されてしまった。

(1) 戦後革命は一定の前進、成果を残したがブルジョア民主主義革命は完成されず、権力の階級間の移動はなかつた。

(2) 綱領・路線が基本的に正しくても敗北することはあるが、徳田同志らの闘いはまさにそれであり、問題は、国際国内情勢の転換の中で宮本修正主義が中傷、清算せんとしたのに、徳田同志の死去等主客の要素によつてこれを防ぎきれなかつたこと。

この反修・防修を貫徹しきれなかつた諸要因は、客観的歴史的要素と同時に、主觀的にはマルクス資本主義批判 || プロレタリアートの階級的独立性 || 党組織化を中心とする新民主主義革命の綱領・路線に不十分であつたことにあります。

（五）日本社会と権力の現状規定および革命の基本性質とその特質について

一 「米帝に従属し、天皇制官僚を中心とする独占資本が権力を握っている」という認識や「民族的民主主義的課題をふくんだ社会主義革命||人民民主主義革命としての社会主义革命」は正しいか

貴兄は、戦前については二重帝国主義、天皇制絶対主義権力と二七年、三二年テーゼの正しさを信奉されているわけですから、戦後の革命の基本性格をプロレタリア社会主義革命であるとするとなれば、どこかで天皇制反動勢力から独占資本へ、アメリカ帝国主義から独占資本へ階級間の権力移動がおこったことを前提にしていることになります。だとすれば、革命か戦争（戦争前段の日米の決裂状態）がおこったことになります。しかし、貴兄はこれを明瞭にしていません。

前章でのべましたように、四七、四八年には権力の移動

地所有と天皇制、およびアメリカ帝国主義に従属・寄生・利用することによつてもたらされたものであり、独占資本は売国的・反動的で、独立・自立性を基本的にもつていません。

アメリカ帝国主義は食料と原料資源と石油、原子力、宇宙、航空産業、エレクトロニクス軍事産業等食料とエネルギー、軍事の、日本経済の再生産の基本命脈はガッチャリにぎつており、アメリカ帝国主義と日本独占の闘争はいくらかまつてもこの枠内の矛盾をでいてません。天皇制的土地独占による反動的収奪を主要な財源として金融資本的蓄積がなされ、労働力は、この天皇制土地独占とアメリカ帝国主義に規定された零細農漁民の農業農民危機、脱農||プロレタリア化がなされていいたわけで、これも単なる金融独占資本的蓄積とはいえません。

貴兄がいまいちど経済面における米帝と天皇制の位置、役割について一考されることを願うものです。

政治的軍事的にアメリカ帝国主義に支配されていることは貴兄も十分認められています。このような戦後のアメリカ帝国主義の日本侵略・占領と反革命のなかで形成された政治・軍事・経済・社会構造、支配階級の人脈等はかなりの経済的変動や矛盾があつても根本的な変化は生まれようありません。力の変化はアメリカ帝国主義と支配・従属

がおこったとはいえません。たとえおこったとしても、アメリカ帝国主義が支配しているのですから社会主義革命とはいえません。反人民の反動的天皇制勢力であるがゆえに平氣でアメリカ帝国主義に壳国したわけですが、それにしても「独占資本が権力を握っていること」「国内階級矛盾が主要矛盾となつてゐる」となると日本独占資本はどこかで権力をアメリカ帝国主義から奪還したことになりますがそれはいつですか。五一〜五三年頃、六〇年前後、六五、七〇、七五年、いつですか。貴紙によれば、五〇年代は「従属」し六〇年代に「自立」した、とされていますから、この「自立」は経済的自立ですか政治的自立ですか一どうも六〇年代のような気もします。

ブントや構造改革派は一九五八年をひとつのマルクマールに「日帝復活自立論」を展開しました。貴兄の「自立」は何が基準ですか。私は、単に日本独占資本の経済的動向だけでもみると五〇年代中期、六〇年前後、六〇年中期七〇年、七五年とどれでも「復活自立」と規定できなくもないと思う。しかしこれは一面的で近視眼的です。

戦後革命期で、日本軍事的封建的帝国主義はずいぶんと反動的だがブルジョア的に改造され、基本特質はかわらないままアメリカ帝国主義に経済・政治・軍事等全面で支配・従属されたわけで、日本資本主義の発展は天皇制的大土

関係の枠内でのことであり、天皇制官僚に通じたものであり、独占資本相互の矛盾はアメリカ帝国主義支配の枠内で調整されてきたし、天皇制勢力と独占資本の間も天皇制支配のもとで調整されてきたものです。

日本帝国主義は自立して、権力は独占がにぎり、アメリカ帝国主義が「反革命共同利害をまもるために日帝権力を補足してくれて、慈善事業をやつてている」というおめでたい意見もあります。これは権力と同じ主張であり、唯物弁証法でもマルクス主義でもなんでもありません。新左翼トルツキズムはこのような「反革命共同利害の補足論」をぶつけていますが、これは恣意的です。かれらは日本社会との権力の歴史的特殊性をまったく理解できず、労農派の伝統をうけついで「資本論」や「帝国主義論」の一般論を日本社会に機械的にあてはめて、それで分析できたと思つているわけです。経済の特殊性も、経済と政治がかならずしも機械的に照應しないこともわかつていません。これに似かよつたある意見は、日米に不均等発展がすすみ、裁判所・警察・刑務所・国会や自衛隊は日本独占がにぎり、日本社会のなかば以上の権力を独占資本がにぎつたという論理を展開しています。たしかにこう一面もありますが、蒋介石は表面的には経済、政治、軍事の全権を掌握し、チュー

になつたとしても自立したことにはなりません。権力を表面上、形式上、代理人が掌握することはいくらもあることです。アメリカ帝国主義は、自己は後景化して自己の代理人に形式上全権を移譲することはよくあることであり、直接支配から間接支配になつたからといってべつに権力を掌握する階級や民族が移動したわけではない。問題は、戦後直後の政治、経済、社会、権力構造全般が変わつたか否かです、その基準は、革命か、日米間に戦争か戦争前段の情勢が展開しているか否かです。これ以外に権力移動を主張するのは一面的です。

日本独占資本が権力をにぎり不均等発展がはたらけば、日米関係は基本的には帝国主義間矛盾の関係になり、民族矛盾ではなく、社会主義革命の任務に民族的任務は従属されるべきです。また同じく対ソ関係も帝国主義間矛盾です。対米帝間だけ帝国主義間の矛盾で、対ソ矛盾は民族矛盾とするのはチグハグです。こういう論理を展開するのならば中核派の「日米争闘戦一革命的祖国敗北主義—アジア侵略を内乱へ」がいちばん首尾一貫しています。アメリカ帝国主義に権力をにぎられているがゆえに日米間の独占資本主義間の矛盾が米日支配階級によつて調整されているし調整可能なわけであり、アメリカ帝国主義の支配をぬかせば中核張りの主張が正論になります。対ソ矛盾を強調するため

ジー」の民主主義をめぐる矛盾であり、このなかで、（独占）資本と賃労働・貧農の矛盾が発展しているわけです。これを混同しては国内階級矛盾を正しくとらえられません。貴兄のいう階級矛盾はこの区別がなく、一般民主主義をめぐる矛盾が存在せず、対外矛盾と対内矛盾との関連が切り離され、連関性を欠いています。

日本国内外の基本矛盾は

- ① アメリカ帝国主義と日本民族の民族矛盾（このなかに日米独占資本の矛盾が存在し、アメリカ帝国主義寄りで調整されている）
- ② ソ連社会帝国主義との民族矛盾
- ③ アメリカ帝国主義・天皇制勢力・売国反動独占資本対人民（このなかに資本と賃労働の矛盾が存在し、米日反動寄りで調整されている。）
- ④ アメリカ帝国主義・天皇制勢力・売国反動独占資本対被抑圧民族の矛盾（このなかに独占資本と被抑圧民族の矛盾が存在し、アメリカ帝国主義寄りで調整されている）

であり、これに新しく以下の矛盾が発展しつつあります。

- ⑤ ソ連社会帝国主義と国内のその手先対日本人の矛盾
- ⑥ ソ連社会帝国主義と国内のその手先による被抑圧民

に對米民族矛盾が消滅したとしたり、そのためには不均等発展や権力の分有度の変化を主張したりするのは、展開のしかたがまちがっています。矛盾は消滅していず、調整できただけであり、権力の掌握階級が変化したり性格が変わるとか、とするのはまちがいです。

日本独占資本が海外に侵出し経済侵略をやつている。これは経済的には明瞭に帝国主義です。しかし、注意しなければならないのは、すべてこれらの経済侵略はアメリカ帝国主義の軍事力、体制の庇護、従属のなかでなされ、アメリカ帝国主義と天皇制官僚に寄生・従属しつつなされていること。したがつて、一見日本帝国主義に対する被抑圧民族の矛盾が激成されつるとみえつとも、じつは、米日反動勢力と被抑圧民族の矛盾が主要矛盾であり、そのなかに次要の矛盾として日本独占資本と被抑圧民族の矛盾が発展しているのです。これを混同してはなりません。日本帝国主義の復活はあくまで対米従属下のそれであり、その性格は自立した帝国主義ではありません。「ブロック化」や「勢力圏形成」とかいつてもなしくすし的で、対米従属下のそれです。

国内の階級矛盾にもいろいろあり、その中の主要矛盾はアメリカ帝国主義と天皇制勢力・反動売国独占対人民（労働者、農民、小ブルジョアジー、一部自由主義ブルジョア）のそれです。

①が主要矛盾から徐々に後退し②が主要矛盾に徐々に上昇しつつあるがゆえに、これが③、④に作用し③、④が消滅しないが後退し③にも④にも内部分化が生じたこと。そして、新たに⑤、⑥の矛盾が生まれはじめたといえます。貴兄のいう

族との矛盾

の四つの基本矛盾では、主要矛盾が①から②に移行しつつあることが③にどのように作用するか④にどのように作用するかうまく説明できません。これは、日本社会の権力が独占資本ではなく、アメリカ帝国主義と天皇制勢力と反動独占勢力に握られていること、ここをあいまいにしているところにあります。

貴兄は一方では「アメリカ帝国主義に政治的軍事的に従属している」とい、他方では「国家官僚独占資本家階級の一形態」とつており、つまり「ブルジョアジーが権力をにぎっている」としているわけですから、ここでも背理

した展開をしているわけです。アメリカ帝国主義に従属しているのであればその権力はアメリカ帝国主義と日本反動勢力がにぎり、独占資本を含めて日本反動勢力はアメリカ帝国主義権力の代理人ですし、決して独占資本がにぎっているとはいはず、日本独占資本がにぎっているのであれば、

アメリカ帝国主義には従属しないと主張し、日米間の矛盾は帝国主義間の矛盾として規定し、民族的課題として位置づけるべきではない。しかし、独占資本が権力をにぎり、また、それを日本独占資本がゆるしているのもおかしなことです。この背理・折衷主義は戦後日本革命の総括の背理・折衷主義の展開形態です。また、段階性をあいまいにした連続性の主張の折衷主義と表裏の関係にあります。

国家権力をになら階級を「国家官僚独占資本家階級」と「金融独占資本家階級」にわけることの意義がよくわかりません。これは対ソ連有和ファシズム派と頑迷連合派の支配階級内部の経済的基礎を説明せんとするものかも知れませんが、ここはもう少し留保しよく考えます。

権力形態をブルジョア独裁の一形態としてのブルジョア

天皇制としていますが、これは戦後革命の敗北の性格からしてブルジョア独裁とはいはず、アメリカ帝国主義と天皇制官僚勢力と地主・反動売国独占資本の反動独裁というべ

き思います。

貴兄は「革命の主体勢力」の箇所では「下層労働者階級を指導的階級とし、労・農・漁三大生産階級と被抑圧民族被差別大衆を主力軍とする」とのべていますが、ここでも矛盾した主張をしています。プロレタリア社会主義革命があるわけですか。それはどの場合ですか。今は同盟軍や連合対象をもつてているのですか。このへんがはつきりしません。

私は、

② 古い型のブルジョア民主主義革命→ブルジョアジー農民、プロレタリアート、小ブルジョアジー

③ 新民主主義革命（労働者と農民の革命的民主主義的独裁をめざす革命）→プロレタリアート・農民（とりわけ貧農を主力軍とする）小ブルジョアジー、一部自由主義ブルジョアジー

④ 民主主義革命が反帝国主義、反植民地主義の民族解放革命と一体化している→プロレタリアート、農民、小ブルジョアジーを原動力にし、民族ブルジョアジーを

一面闘争一面同盟だか同盟軍にし、大ブルジョアジー

とすら条件的に一面闘争一面連合だが、連合しそる
④ 社会主義革命→プロレタリアート・貧農、同盟軍と

しての小ブルジョアジー

⑤ ブルジョア革命が完成した國の反ファシズム闘争→これは社会主義革命段階の防御戦術であり、この場合は自由主義ブルジョアジーと同盟することも考えられる。また独占ブルジョアジー内部が分裂することも考えられる。

⑥ ファシズム國にブルジョア民主主義國が占領・支配された場合→プロレタリアート・貧農を主力軍に、小ブルジョアジー、農民、売国奴以外の独占ブルジョアジーや自由主義ブルジョアジーと連合する場合もある。ただし、この場合は民族民主主義革命になる

など、革命の性格における味方、同盟軍（連合対象）、敵を整理してみましたが、社会主義革命の場合は、ふつう⑥である。特殊な戦術として⑥とか⑦とかがある。この⑥と⑦の問題はあとで検討するとして、ファシズム支配や占領・支配の事態がないのに、ブルジョア革命を終えた國で社会主義革命の戦略・戦術として「反独占人民民主主義革命」を主張し、プロレタリアート・貧農と小ブルジョアジー以外に非独占の大・中・小資本や富農を同盟軍に拡大し、事

実上、民族民主主義革命とかわらないものにする意見もあります。そして、樹立すべき権力をプロレタリア階級独裁を本質とする人民民主主義独裁として、プロレタリアートと貧農とその同盟軍としての小ブルジョアジーに非独占資本を加える展開をする意見があります。これは社会主義革命を民族民主主義革命におし下げる折衷主義であり、社会主義革命である場合⑥とか⑦とかの特別な場合以外はプロレタリアートと貧農とその同盟軍としての小ブルジョアジーとなるのではないか。これが原則です。しかし、独占資本や大資本に中小零細資本が圧迫され、あるいは富農が圧迫され、独占資本の寡頭支配体制によってブルジョア民主主義（営業一搾取の自由）が侵される場合、その程度や条件のいかんによつては、これらの資本は一方ではプロレタリアート、貧農を恐れつゝも、他方ではプロレタリアート・貧農と連合して独占資本に対決する面ももち、非独占資本を、程度問題だが、一時的な連合対象とすることは考えられなくはないかもしれない。ただし、これはあくまでもプロレタリアート・貧農の階級的独立性が前提であり、連合の相手も一律化できない。一般に、民主主義革命が完成された國では、非独占資本であれ革命性はなく、主側面は資本所有の防衛、反プロレタリアであり、プロレタリアの側からこの矛盾を調整することはできないのですから、生

産手段を共有化したあとと思われます。東欧の人民民主主義革命は明らかに新民主主義革命の一種であり、ソ連赤軍や反ファシズム解放軍の存在によって民主主義革命が徹底され、売国反動資本の生産手段が没収されたのです。一応私は、社会主義革命の戦略・戦術として人民民主主義革命を主張し、プロレタリアート・貧農を味方、小ブルジョアジーを同盟軍とする以外、連合の相手を非独占資本にひろげる考えには、非マルクス主義として批判しておきます。

貴兄は人民民主主義革命についてどんな見解をもつてますか。民主主義革命や民主主義闘争の意義を強調するあまり「人民民主主義革命」「連続革命」とかを主張して、革命の基本性格規定を、権力をにぎる階級を軸にして設定する方法（もちろんこの前提には、この権力を根底で規定するウクラウドの分析がいる）をあいまいにして、つまり、権力を資本がにぎっているか、他民族の帝国主義や封建地主や君主がにぎっているか、これに従う反動資本や買弁資本がにぎっているか、の境界線をあいまいにして、すべてを「連続革命」でかたづける議論もありますが、これは混同した議論です。

当面の日本の革命をいま一度まとめておきますと、シア二月、一〇月革命によつて実現された労働者農民の革かんであること。

第一、古い型のブルジョア民主主義革命とはちがう、ロシア二月、一〇月革命によつて実現された労働者農民の革かんであること。

ことがとくに要求される民族民主主義革命であること。

この革命の前途は社会主義革命にあり、独占資本主義が高度に発展している社会ゆえ、中国やロシア革命以上にこの革命が社会主義革命に連続的に発展転化する客観的物質的諸条件があり、労働者・貧農の社会主義革命をめざす主体的条件即ち階級的成熟条件があればただちに連続的に転化する。二つの革命の間は主として人民の側の主体的条件いかんであること。

したがつて民主主義革命を社会主義革命の前提条件をつくり出すものとして、民主主義革命のなかで社会主義革命を準備するように、一個二重に鬪わなければならないこと。また、民主主義革命の対象が反動的大独占や大中小の諸資本をふくんでいる点では、あるいは、大土地所有者の土地の国有化は、農民諸個人への土地の分配を含むものの、その軌道を協同組合化にすえていた点で、社会主義・共産主義をめざすマルクス・レーニン主義の共産党とプロレタリアートに指導されている点で、経済的にも社会主義建設の導入口を創りだしていく点でも、民族民主主義革命だが社会主義を広範にふくんで、これに連続する性質をもつていること。

第四、この革命は民主主義革命である点で戦前の民主主義革命と本質的に同じであるが（ロシア革命型）また、第

命的民主主義的独裁を継承するものとなる。

第二、ロシア革命をもつて開始された世界プロレタリア社会主義革命の一環として、プロレタリアートが指導権をもつて革命的階級・階層が連合して成立した新民主主義革命と共に通するものであること。

第三 天皇制的封建的土地所有をなれば基底にし、アメリカ帝国主義とそれに従属する天皇制勢力に支配される高度に発達した国家独占資本主義の、アメリカ帝国主義と天皇制官僚勢力、大土地所有者、売国独占資本、大資本等を敵とし、プロレタリアートが指導権をもつて、農民、小ブルジョアジー、一部民族的民主主義的ブルジョアジーを連合させた人民共和制の権力を樹立する民族民主主義革命であること。

アメリカ帝国主義に支配されているがその支配を利用しつつ、あるいは天皇制土地所有をなれば基底としているとはいえ、戦前とくらべブルジョア的改革が進み、これらの諸要素を利用して国家独占資本主義経済が高度に発展している点で、民族民主主義革命でありながら、資本主義的私的所有をめぐる労働者・貧農のプロレタリア階級独裁・社会主義革命をめざす独自の目的意識的闘いが決定的に要求される、つまり、プロレタリアートの階級的独立性、「純粹プロレタリア的闘争を一般民主主義闘争に結合させる」

三世界諸国の反帝反封建の民主主義革命と共通している面をいくぶんながらもつが（中国型）、これに加え、帝国主義世界戦争のなかで封建制を残しつつも独占資本主義段階に到達し、高度に発達している資本主義が米帝国主義に占領支配されている点で、現代的特殊性が加わっている。この点で第三世界諸国のそれにくらべ圧倒的にプロレタリアートの比重がたかく、社会主義革命の性質を広範に二重化させている民族民主主義革命である点で、大きな差異がある民族民主主義革命であること。

第五、他国に支配されていない米やソ連、仏（英國）等は人民共和制をかなはずしも権力闘争としない一段階のブルジョアシア社会主義革命であるが、これらの国の社会主義革命とは民族民主主義革命である点で異つていて。社会主義革命の戦略・戦術としての人民民主主義革命（そんなんのがあればのことだが）とも異つていて。等、五点位にまとめられると思います。ロシア革命一戦前革命型、中国革命型の性質を内包し、かつ、社会主義革命の性質を広範にふくむ点で前二者と相当の差異をもち、にもかわらず、一段階社会主義革命ではない、といった多面性をもつ新民主主義革命である。

「貴兄の「米帝に従属し、独占資本が権力をにぎつてい

の見解は戦後革命期の階級闘争、反革命の構造からしてあります、折衷主義的觀点で、それが「四つの国内外の基本矛盾」の設定方法や内容、あるいは「主体的勢力」の規定方法や内容に現われていると思えます。革命論的には二段階か一段階かをあいまいにした「人民民主主義革命論」になつてゐると思います。

貴兄は日本社会とその権力の特質、その多侧面に一つ一つ着目し、その統一的把握と全体と個々の解決の方向を努力され、日本革命をめぐる諸問題に意欲的に答えられようとしてます。しかし、これを「社会主义革命」の觀点からとらえようとして、革命方法論や戦後革命の総括、現状規定と革命の性格やその諸側面の把握において、唯物論的で弁証法的に、一元的に諸問題を整理しきれなくなつています。この根元には新左翼トロツキズムの「社会主义革命」論を、その出生にさかのぼつて批判的に総括していく、トロツキズム社会主義革命論とマルクス・レーニン主義の革命路線を、「民族的民主主義的課題を広範にふくみ、人民民主主義革命を戦略一戦術とする社会主义革命」のような中間主義的社會主義革命論を提起して境界線を引こうとしているところがあります。これでは折角の種々な問題把握も、ガッチャリした唯物弁証法一元論の理論性をもつて統一的に位置づけきれず、折衷主義におちいらざるをえません。

的民主、経済的自立、軍事的自衛——編集部

私はこの点で貴兄方の民族・民主主義闘争のとらえ方をたかく評価していること(つまり、日本社会とその権力の特殊性に注意をはらい、また、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想にもとづく民族的闘争や民主主義革命に対するプロレタリアート・共産主義者のかかわりあいかたをみせていること)「三自主義共同綱領による人民の大連合」を大いに支持していること、この点をあくまで忘れないでください。また、貴兄方の創刊号基調の国際情勢分析を、第二次世界大戦の総括をやりつつ、これとの関連で分析する方法までふくめて支持していること。これについては最後に若干の異論もふくめてのべますが、さしあたっては問題点をしづらきる必要があるのでここではのべません。また国内の情勢分析については、日本社会の権力規定の相異から、私にはいくぶん強引すぎる点を感じるし、支持はできませんが、「支配階級の分裂」のところはずいぶん鋭い分析で学ぶべきところがあります。このような分析視点はマルクス主義的唯物論者のみに可能ことです。「持久戦」についての問題意識も正しい。

そのうえで私は「しかし、完全にはレーニン的二段階戦略にたつていず、いわば、社会主义革命の過渡的戦術みたいなものとして反霸権・反ファシズム闘争が位置づけられ

(六) 日本資本主義社会と、その権力の歴史的特殊性を正しくつかみ

一 天皇制奴隸性打倒・人民民主主義革命と賃金奴隸性打倒・社会問題を正しく解決しよう

＊ 三自主義共同綱領の徹底実現は民主主義革命の段階を招来させないか。三自主義共同綱領を民族民主主義革命の一環に位置づけるべきか、社会主义革命の一環に位置づけるべきか、いずれが日本の実際に合致しているか

常盤君へ。いよいよ日本の現状規定と基本政治路線、その戦略一戦術や当面の任務、政策の問題についての議論になりました。つまり、最初の手紙の「反霸権・反ファシズムー三自主義共同綱領による人民の大連合」をどうとらえるのかという問題です。(注)三自主義とは対外的自主対内

この闘争が民主主義革命なのか社会主義革命のはじまりなのか、その連関について中間主義的折衷主義的でまぎらわしくなっています。……しかし、民族的課題、民主主義的課題を前面におしだし、民族民主主義統一戦線をもつとも広範な反霸権統一戦線として組織していくにはやはり支障になる考え方であり、やはり新左翼トロツキズムの小ブル『社会主義革命』路線のなごりがうかがえます」といつた前言をいま一度提起しなおします。この点創刊号を読みかえしてみました。

＊ 人民権力と「改造」の規定について

貴兄らは、返信でもあるように日本革命の基本性質を「プロレタリア反帝社会主義革命」と規定しています。しかし、この「社会主义革命」の内容について「プロレタリアート独裁を本質とする人民政権を樹立し、官僚的国家独占資本主義を改造して、反霸権・自主独立の社会主義新日本を建設する以外にはない」とのべていますが、この「プロレタリアート独裁を本質とする人民政権」の人民政権の内容が全く説明されていません。この人民権力は労・農・小ブルジョアジー以外に中小資本は入るのですか。また、反動売国勢力と闘った資本はどんなあつかいをうけるのですか。この人民政権がプロレタリア・貧農を主体に、全農民や小

ブルジョアジー、それに資本では非反動帝國勢力をくわえるのであれば、私の考へてゐる人民民主主義独裁権力とかわりないことになります。(時期と程度問題ですが、民主主義革命に功勞があれば、プロレタリア・貧農の統制下ではあるが独占資本を参加させることも考へられる。あらかじめいっさいを排除しない)

また「官僚的国家独占資本主義を改・造して」と、社会主義革命をとなえるのに「國家官僚独占資本主義を改・造して」のごとく全資本所有關係を廃絶するとはいわず、社会主義革命の第一段階の段取りとして「独占資本の生産手段を没収するのか否か」も、あるいはもつと資本所有關係では限定して売国反動独占資本にその没収を限定するのかもよくわかりません。貴兄は、支配階級も国家官僚独占資本家階級と金融独占資本家階級をわけてとらえていますが「改・造」の対象とは前者のことを指しておられるのですか。そのさい、金融独占資本の方はどうなるのですか。

もうひとつ、貴兄らの国家官僚独占資本主義の規定がよくわかりません。ソ連の場合は、生産手段を国家官僚が独占し、国家官僚独占資本家階級としてソ連プロレタリアー・人民を搾取しています。たしかに日本資本主義は、戦前からの天皇制絶対主義権力によつて上から官僚主義的に形成され、官僚資本家的性格を濃厚にもつ天皇制官僚が國

生れそうです。

* 四つの矛盾の位置・国内階級矛盾をどうとらえるか

貴兄らは、反覇権・反ファシズム・三自主義共同綱領を導く前提として日本を構成する四つの基本矛盾を、

- 対ソ民族矛盾
- 対米民族矛盾をはじめとする他の帝国主義との矛盾
- 帝国主義被抑圧民族としての第三世界諸国人の矛盾

国内矛盾 ○ 階級矛盾

ととらえ、国内階級矛盾が主要矛盾化したととらえ、対外的には対ソ民族矛盾が増大したととらえています。この分析は私と違います。ただ国内階級矛盾が主要であるという指摘は階級矛盾の内容によりますが、正しい。国内階級矛盾に関しては、我々は、天皇制反動勢力(反動独占資本をふくむ)と人民の矛盾と、資本と労働の矛盾を二大階級矛盾と捉え、国内階級矛盾が主要になりつつあることには賛成ですが、この矛盾の性質がちがつてゐると思う。貴兄

らには、一般民主主義を求める物質的基礎が独占資本と人民との一般的の矛盾に解消され、天皇制反動に対する民主主

有部門で前近代的な搾取をやつていたといえないことはないが、しかし、日本資本主義はその権力を絶対主義権力に補充・代位されたと見え、その点で絶対主義権力と密接に一体化し、これに妥協・寄生した、さらには地主的

視点とは別に、プロレタリア世界革命からの延命のために帝国主義がソ連官僚制国家独占資本主義に見習い、これに対抗するべく、国家独占資本主義の国家官僚独占資本主義への発展転化の可能性、現実性を説いたことがあります。ただ、現在の日本の天皇制国家官僚階級を官僚独占資本階級と規定するか否かの問題です。・搾取がなくはないのですから、ソ連ほど大規模ではないが天皇制官僚は官僚独占資本家といえないと見えないこともない。ここは興味ある問題ですが一応留保し、とにかくこの「改・造」の内容を明瞭にしてほしいといつておきます。「改・造」となると、さしあたっては全面廃絶するわけではありませんから、どこを重点にしてどの程度か現「國家官僚独占資本主義」をかえるわけですから、そうすると、民主主義革命の性格をもつのではないかという印象をうけます。この日本国家官僚独占資本主義については、厳密に規定してゆくと非常に興味ある分析が

義をめぐる矛盾がぼやけています。このことは、これまで指摘したように戦後革命の総括や日本資本主義の性格、日本社会や権力の特質の理解の相異と結びついています。私は現日本社会は米帝とこれに従属する天皇制勢力に支配される、天皇制的土地所有を基本的には基底とする、基本的に戦前と同じ二重帝国主義社会と考えます。

戦後日本資本主義は、近代資本主義の装いをもちつゝもけつしてそうでなく、米帝に助けられた天皇制地主勢力が戦前の伝統を継ぎつつ、産業資本や金融資本に転化したプロンヤ型の地主→資本家コースの資本主義発展の道をたどつており、その経済的基礎においても上部構造においても、前近代性をやはりまとわりつかせていると思います。だから、人民の民主主義闘争が革命的性格を帯び、支配階級内部に純戦前型の天皇制反動支配階級と、これに妥協と抵抗をしつつ人民の闘いを利用しながら、しかし、革命に對しては徹底して弾圧するもうひとつの妥協的な金融資本のグループが発生するのだと思う。

* 三自主義共同綱領を徹底実現する民主主義革命と社会主義革命の関連

この共同綱領について貴兄らは①「反覇権・反ファシズム——对外自主・対内民主・自衛・自立経済」と規定し民

主主義綱領をはつきり規定しています。このように民主主義綱領をはつきり規定するのは正しいことです。しかし位置づけに関しては「この徹底実現は社会主義日本を実現することなしには不可能である」とするだけで、この徹底実現がどのように社会主義日本の実現にいたるかは、その経済的基礎や客観的条件、主觀的条件、段取り等は明瞭にされません。民主主義綱領である以上、この徹底実現は日本の反動的売国的国家権力とその生産諸関係と衝突するがゆえに、不可避に、民族民主主義革命の徹底完成をめざす米帝打倒、ソシ帝打倒、天皇制打倒、人民民主主義革命、人民独裁の日本人民共和国の樹立の民族民主主義革命には至るものの一それも闘う主体の問題に規定されるが、この人民独裁の人民民主主義共和国からプロレタリア階級独裁の社会主义共和国の間には、やはり、決定的な飛躍がありますから簡単には、否、本質的には連続的に転化されません。転化のために、この民族民主主義革命の闘いのなかでプロレタリア階級独裁・社会主義革命の独自の目的意識的準備をやり抜き、これを民主主義革命と結びつけねばなりません。ここにはあくまで段階性があり、連続性は主体的条件の問題です。この段階性をはつきりさせる日本社会と權力の分析が必要なのです。それが天皇制社会のことなのです。これをつかめば連続性の問題も正しく解決されます。

* 日本資本主義とその権力の歴史的特殊性を正しくとらえ、民主主義革命と社会主義革命の段階性と連続性の問題を正しく解決しよう。

貴兄は「国民経済の自立と軍事的自衛力なしに对外的な自主性を保つことができず、他民族の抑圧と収奪・搾取・国内農業の破壊のうえにしか存在しない現在の国家官僚独占資本主義経済の改造なしに経済的自立はありえず」といて「国民経済の自立」を説き「軍事的自衛力の必要」を説き、国民経済の自立をやつておらず売国的で米帝に軍事的に従属・支配されている日本国家官僚独占資本主義を批判し、かつ「国内農業の破壊」をやる日本国家官僚独占資本主義を批判してます。

要するに、貴兄の三自主義共同綱領の物質的条件として

おしだし、広範な反霸権・反天皇制ファッショの統一戦線を推進することになります。民主主義の問題を天皇制対人民の問題（天皇制反動売国独占対日本人民）としてとらえないで、天皇制をかたわらにおいやつた独占資本対日本人民の凶式は決定的に日和見主義、修正主義に接近します。独占資本の支配の道具として天皇制を位置づけてもやはり恣意的になります。

貴兄らは対内民主について「帝国主義は民主主義を空洞化する」と、帝国主義論の「反動と暴力の熱望」の一般論から民主主義破壊をうらづけようとしています。これまで貴兄らが強調していた天皇制の問題は一体どこにいったのですか。天皇制ファシズムは一体どこにいったのですか。天皇制の問題が肝心なところで忘れられてしまってます。問題の中心はここです。要するに、絶対主義天皇制権力が戦後革命期にも米帝にたすけられ売国的に延命し、戦後三十年間米帝の力に依拠し「象徴天皇制」なる「立憲君主制」づらをして存続し、力をたくわえ、米帝が弱体化するや自然力で天皇制反動勢力を糾合しつつ、これに金融資本を従えつつ、テロリズム的反動攻勢にうつてでてきていること。天皇制の絶対主義の反動化とテロルと金融資本のテロルが二重化し、その反人民性ゆえにソシ帝にまで売国宥和しつつ、天皇制ファッショを推進してきてること。これに対して、日本民族・人民の不満をとりこみ融和しつつ天皇制にいくらか抵抗しつつ妥協し、人民支配を貫徹せんとする頑迷連合派の支配階級が生れています。したがって（現在の）中心任務は反霸権と天皇制打倒を前面に

対米従属・軍事従属、この従属に寄生しその庇護下で他民族の搾取、収奪をやり、農業を破壊する日本国家官僚独占資本主義を批判しているわけです。

ここで、一方では、あなたは対米従属の側面やソシ帝による日本への圧迫、干渉、支配志向等の側面を指摘し、対外的自主・自立・自衛を説き、この側面から民主主義革命の綱領を裏づけてます。ところが他方では、他民族抑圧と搾取、収奪を、ソ米の霸権支配との関連や天皇制軍国主義とこれに屈從する独占資本主義のからみあいを捨象し、ストレートに日本帝国主義の抑圧・搾取・収奪を強調しています。国内農業破壊でも、対米従属の売国農業と天皇制の土地独占にもとづく零細小農制を基礎にし、これを主因にしつつ、それに売国的反動的独占資本主義を軸とする農民収奪がくわわっている関係を見失って、農業破壊を独占資本一般的搾取・収奪を主にしたものにしています。もちろん、売国農業や土地問題も指摘しますがつけたしにとどまっています。

私は、日本独占資本が第三世界諸国人民を抑圧・収奪していることをじゅうぶん認めるものです。ただし、この行為は、米帝国主義の軍事的政治的支配力に依拠しこれに屈服・従属して、第三世界諸国人民の反抗を压殺しつつなさいているのであり、日本单独でやられているものではありません。

* 一般民主主義の任務は天皇制打倒・人民共和国樹立の関連で位置づけられるべき

ません。単独でやりきる能力はありません。さらに貴兄も指摘のとおり、米帝一元世界体制の瓦解化に規定され、今度はソシ帝にくらがえして抑圧・搾取・収奪を続けようとしています。また、これを推進している日本支配階級のなかには、天皇制官僚を軸とする天皇制反動の軍国主義グループとこれに対抗するグループの矛盾があります。いわば現日本帝国主義は、戦後米帝に従属し、これを最大限利用しつつも、他方では、戦前的に復活しソ連とも手をくまんとする対ソ有和・ファシズム・南侵の二重帝国主義の軍事的封建的帝国主義を復活させんとするグループと、もうひとつは、対米従属しつつも対ソ対決・対中連合の頑迷連合グループが存在し、いずれも米帝に、米帝の利害のもとにあやつられ支配されています。

米帝とソシ帝から自主、自立、自衛しつつ、この軍事的封建的帝国主義を経済、政治、社会面で一掃し、日本国家独占資本主義を革命的民主主義的に改造すれば、対外的に中国や第三世界諸国と連合すれば、抑圧・搾取・収奪の問題はかなり解決されます。もちろんそれでも日本資本主義は独占資本主義の性質を変えたわけではないですから、プロレタリア階級独裁・社会主義革命によって、全きの自力更生の農業基礎・工業主導の社会主義社会をつくらないかぎり対外的抑圧・搾取・収奪の問題は解決しません。しか

し、要は、米ソから自立し、売国反動勢力との経済の動脈をおさえれば決定的前進となるということです。

農業の問題も、まず、対米自立して売国農業を返上し、対内的には地主・売国反動独占と天皇制国家官僚が独占する山林原野やその他の土地を国有化し、そのもとで農業集団化と生産力増強を国家の援助のもとに、また、独占資本を規制し、シェーレ価格を是正しつやることです。これを前提にして、農業基礎・工業主導等の社会主義的再生産構造をつくりあげてゆくことです。食糧自給は対米自立、土地革命、独占の規制と国家の援助、集団化によって、そしてこれに日本の発達した農芸科学と機械化が結合すれば十分可能と思います。結局、すべては天皇制と対米従属の反動的売国的情勢を打破すること、このことです。

* 自衛隊は天皇反動勢力と米帝の人民支配の道具であり、解体し、全人民の武装におきかえねばならない。

ここに人民民主主義革命の要がある。

「国内労働者階級人民に銃口を向けているブルジョア常備軍・自衛隊を全人民武装にとってかえることなしにいかなる侵略にも抵抗しうる自衛力とはなりえないからである」この点では一致します。この点をはっきりさせなければまったく修正主義です。自衛隊は天皇制反動売国勢力と米帝

の日本人支配の道具であり、その最も忠実な反革命の道具であり、日本軍国主義復活の支柱である。そして他方では、日本独占資本主義の支配道具である。だから自衛隊の解体は日本民主主義革命にとって、その帰すうを決する要石であり、これを解体しつつ、これにとつてかえる形で独自に全人民の武装を実現してゆかねばならない。我々は日米両帝国主義の反動暴力支配の要である政治警察、自衛隊、裁判所、刑務所、国会等の諸権力機構・機関に対しては、これとの徹底的対決、解体の闘いを組織してゆかねばならない。

ただし、自衛隊の戦略的解体を戦略的戦術的に追求しつつも、自衛隊内の反動売国勢力に対して、その内部矛盾を利用しつつ、民族民主主義革命にむけての民主主義的階級闘争を推進し、自衛隊内に反動と民主主義の対立を激化させることを忘れてはならない。あるいは、ソ連社会帝国主義の国内侵攻があれば、その段階において条件のいかなによつては、プロレタリア・人民は独自の対ソ反侵略民族自衛戦争を開戦しつつ、抗ソと人民民主主義の保障を条件に独立自主、一面闘争一面連合、自衛・有利・節度の三原則で連合してゆくことは断固として追求しなければならない。

* 三自主義共同綱領の徹底実現における段階性と連続性をさらに確認しよう

「三自主義共同綱領はこうして民族民主主義闘争と社会主義革命をむすびつける。反霸権・反ファシズム人民連合はこの三自主義共同綱領にもとづいて結集した労働者、人民の闘争と経験から各分野の実践的具体的綱領・政策・方針をつくりあげるにちがいない」こういう形で貴兄らは結語をだしています。民族民主主義闘争を社会主義革命と結びつけるのは賛成です。また、反霸権・反ファシズム人民連合の綱領を実践のなかからつくりあげていく方法も賛成です。

しかし、今からでもじゅうぶん理論的に確定できる問題は確定しておかねばなりません。つまり、三自主義共同綱領の実現は、天皇制と売国反動独占資本打倒・米帝打倒・ソシ帝一掃の民族民主主義革命、人民独裁権力樹立、日本人民共和国樹立の段階であること。この段階の勝利にむけの闘いのなかで独自に賃金奴隸制打倒・プロレタリア階級独裁・社会主義革命にむけてのプロレタリア・人民の階級的組織化を推進し、人民民主主義革命の中でプロレタリアートの指導権を強固にし、社会主義革命に転化することこうしてのみ日本社会主義革命の道がひらけてゆくこと。

この二点をはつきりおさえておかねばなりません。

この二つの段階は全く性質の異なる段階であり、前者の勝利を前提しなくては後者はありません。また、後者の準備を前者の中で準備し、前者の質をかえない限り前者の勝利もありません。もちろん両者は複合し、前者と後者は一主として主体的な条件に規定されるが、連続性がありますし、この間に万里の長城をきずき連続性を追求することを否定するなどということは革命のうらぎりです。マルクス・レーニン主義の共産党と民族民主主義統一戦線があり、人民の軍隊が人民民主主義革命のなかで創生されていることが決定的条件です。

また、非独占の中小資本であろうと、親米反動独裁につながり、人民民主主義革命に反対してプロレタリア統制にしたがわざ、反革命を推進するのであれば、これらは革命の敵であり、日本人民共和国が成立する以前でも、人民独裁権力の名において打倒し、生産手段を没収することはあります。また、人民民主主義革命であろうと、プロレタリア・ヘゲモニーが強い地域や資本のもとではプロレタリア統制を強め、民族民主主義統一戦線、人民独裁権力樹立の闘いを徹底推進しつつ、全人民の武装を強化し人民革命軍の創建をめざし、プロレタリア階級独裁の条件を独自に拡大し賃金奴隸制打倒・プロレタリア社会主義統一戦線を強化し

てゆかねばならない。これこそが民主主義革命と社会主義革命に万里の長城を築いてはならないことを保障する観点である。

あなたは社会主義革命を主張されるわけですが、かりにこの人民の闘争が「社会主義的」に爆発、発展したとしてもしょう。それでも敵の中心は天皇制勢力になり、これを米帝国主義（ヤソ社帝）が支持・支援し、反革命的に介入します。そうすると、闘いははつきりと天皇制打倒・外国帝國主義打倒の民族民主主義革命の性質を帶び、敵資本階級内部の分裂も激化し、その内部矛盾を利用して同盟軍や連合対象を考えざるをえなくなるでしょう。そして、革命の第一段階は民族民主主義的性格であることははつきりります。そうであれば最初から相互にささえあう天皇制反動勢力と米帝等外国帝国主義に敵をしぼり、革命を段階的に連続的に發展させていくほうが賢明でしよう。打ちきたえられたマルクス・レーニン主義の労働者党の存在と成長が決定的に必要です。民族民主主義統一戦線を最大限ひろげ支配階級内部の矛盾を利用し、敵を孤立させていく必要があります。全人民の武装と人民の軍隊（赤軍）も必要です。これらを基礎とする下からの人民独裁の権力が必要です。この人民独裁権力には、民族民主主義革命を支持する階級はたとえ資本家階級であろうと参加をゆるされます。この

の権力は、原則としては資本制所有関係の存立を承認しているわけですから、根本的には人民民主主義権力ではあれプロレタリア階級独裁の権力とはいきません。しかし共産党とこれに指導される人民軍がこの権力を支え、売国反動の独占資本や資本を没収している点で、また社会化せざるをえないような巨大生産手段は没収する点でも、さらにはた厖大な天皇制資本主義の国家資本の部分をまるまるプロレタリアが支配し社会主義経済を営むわけですから、プロレタリア階級独裁に近い側面を相当程度ふくみ、これに連続していく条件をもった人民権力です。

問題は解釈ではありません。社会主義革命に連続する過程ではこのような民主主義革命の段階が最初にあらわれるること、条件的に非反動売国資本をつみこむことを承認するか否かであり、この民主主義革命の勝利なしには社会主義革命の勝利などありえないこと、また、この段階にむけて人民民主主義革命と社会主義革命の一個二重の組織化をやりそのヘゲモニーをにぎるようにするか、この革命の徹底化抜きに社会主義革命などありえないことを承認するか否かです。この点が一致すれば、貴兄らがこの革命を「プロレタリア反帝社会主義革命」の第一段階と位置づけようと実質は一致していきます。しかし、マルクス・レーニン主義毛沢東思想からすればこれは明らかに民主主義革命で

あり、「反霸權・反ファシズム・自主義共同綱領」は民主主義革命の一環であり、大局的にみた場合社会主義革命の一環でもあるということです。問題は、対象の正しい把握にもとづく、發展の弁証法にしたがって革命の發展法則を分析するか否かです。レーニン的なプロレタリア・ヘゲモニーにもとづく二段階革命戦略の無理のなさ、素直さを認めるか否かです。

日本天皇制、ブルジョア、地主的帝国主義（封建的ブルジョア的二重帝國主義）は戦後革命期、人民革命を恐れ米帝国主義の植民地化的占領支配を受け入れて米帝に身売りし、米帝・天皇制・ブルジョア・地主ブロックは人民革命を圧殺し、米日反動独裁権力を樹立し、この権力をテコに戦前の發展型IIプロシア型と同じ地主→資本家化のコースを機軸とし、米帝に従属し天皇制的土地独占と農民農業犠牲を原動力とする強蓄積II高度成長をとげたこと。このなかで天皇制とその反動支配階級は延命し、高度成長を続けた戦後三十年間は、米帝・天皇制官僚・ブルジョア・地主ブロックを基本構成とする自民党一党独裁で支配階級は一応安定した支配体制を築いたのである。米帝一二世界体制が動搖し、ソシ帝の霸權主義的侵出と、中国と第三世界の伸長のなかで日本支配階級は、その反人民性ゆえに米帝とともにソシ帝にも従属し宥和し、天皇制を前面におしだし、

戦後型軍国主義を復活させ、ファシズム南侵をはからんとする対ソ宥和の頑迷ファシズム派と、中国等第三世界と国内人民の民主主義革命・社会主義革命との矛盾の累積に対してこれに融和し、一方では欺瞞的にとりこみつつ対米從属の枠内であれこれに部分的に抵抗し、天皇制にも部分的に抵抗し、对中国と対中道の連合のもとで対ソ対峙の戦略を追求しつつ、他方では反共反革命で革命派人民を虐殺せんとする、妥協性と欺瞞性をもつた頑迷連合派に分化しつあること。米日反動独裁体制は動搖、分化、再編されつあること。日本人民をとりまく矛盾は、対米民族矛盾が後退し、天皇制対人民の矛盾が増大し、ソ社帝との民族矛盾が増大し、ベトナム侵略時代からくらべれば比較的米日反動勢力の日本帝国主義とアジア人民の矛盾は緩和していること。

日本は、明治維新以来、ブルジョアジーが絶対主義天皇制権力に妥協的・寄生的であったために、また、プロレタリアートが民主主義革命の指導権を握り抜き、天皇制と対決し抜いて段階性と連続性を解決するプロレタリア・ヘゲモニーを培いきれず、天皇制に敗北し、戦前七〇年間も民主主義革命を実現しきれず、戦後革命期の絶好の条件下でも超絶対性をもつた米帝国主義が介入することによって民主主義革命の条件を奪いとられ、天皇制をまたもや延命さ

せたがゆえに、その結果、米帝の支配下で天皇制が存続しつつ資本主義が約三〇年間発展するといった形で、資本主義が全社会的に生成してナント！約一〇〇年もたつのにいまだブルジョア民主主義革命が勝利完成していないという奇妙きわまる天皇制社会が存続しつづけているのです。しかし、明治期の産業資本主義段階の帝国主義列強の植民地化競争戦や、戦後の米帝支配等の特殊な外因を考えれば、このことは合理的に説明できることなのです。そのことによって日本資本主義の秘密も白日のもとにあばきだされます。

戦後革命期に延命した天皇制社会と天皇制権力は、米帝一元体制から『三つの世界』への分化再編の中でその矛盾を爆発させ、民主主義革命闘争と社会主義革命を日程にのぼせはじめたわけです。だから、敵を天皇制勢力と米帝、ソ社帝にしぶり広汎な人民を結集し、まず現段階の革命を天皇制打倒、米帝打倒、ソ社帝打倒の民族民主主義革命にしぶりこみ、この革命をプロレタリア・ヘゲモニーで徹底推進することです。このなかで、独自に賃金奴隸制打倒、プロレタリア階級独裁・社会主義革命に向けての準備を組織し、社会主義革命の前提条件を民主主義革命のなかでつくるよう民主主義革命を組織していくことです。

米帝と天皇制の反動独裁を打倒する民族民主主義統一戦

線と全国人民の武装の敢行、マルクス・レーニン主義労働者党の強化拡大、この三条件をもつて人民の独裁権力の創出をめざすこと。日「共」宮本一派のごとき、議会を通したよりマシな政府→民主連合政府→この民族民主主義政府への平和移行→社会主義政府へのさらなる平和移行のホップステップジャンプで『平和移行』を二度もくりかえす子ともだましの、プロレタリア・ヘゲモニーなしの民族民主主義統一戦線や全国人民の武装やそのプロレタリア前衛党は存在しない。マルクス主義を漫画に墮する「民族民主主義革命」とはまったく関係ない。

宮本は、天皇制と闘いぬいた戦前・戦後直後の日本共産党の綱領とその闘いを清算し、天皇制との対決を回避した修正主義の「反帝反独占民族民主主義革命」なるものに逃げこみ、革命を裏切ったのであり、問題の核心は天皇制です。天皇制への屈服、これこそが修正主義の思想的基礎です。

ブント等新左翼は天皇制との闘争に無自覚なまま、宮本の修正主義に対してもこれを撃沈批判したものの、プロレタリア・ヘゲモニーをもつての天皇制打倒、民族民主主義の貫徹をうちだせず、レーニン的二段階戦略を復権できず、敵を「日帝打倒・社会主義革命」なる資本主義一般に拡散し、日帝打倒・社会主義革命をいかに実現していくかのそ

の要として天皇制との対決と人民民主主義革命をすりぬけているがゆえに、みかけは「左」翼的だが日本人民のそし配になんの対決もしきれてないがゆえに、ギリギリになれば「天皇制封建社会主義」に屈服転向していく。これらの敗北のコースは、ちょうど日本ブルジョアジーが天皇制に一方で抵抗しつつも徹底しては抵抗せず、妥協し、寄生に安住をみいだすように妥協的にすすめられていく。その極限は、連合赤軍指導部に典型された天皇制封建社会主義思想を基底とした反動的小ブルジョア共産主義として現われました。そして、それのマルクス・レーニン主義、毛沢東思想に基づく革命的清算から真に天皇制・資本制と闘える政治思想路線がつくられつつあるのです。

急進民主主義が真に革命的民主主義としてプロレタリア社会主義革命にまで徹底化していくには、急進民主主義を背後から規定している天皇制的家父長制社会構造や制度イデオロギーを徹底してマルクス主義で批判し、まず天皇制に対決していかねばならない。そのとき、小ブルジョア急進民主主義は革命的なマルクス主義的民主主義になります。換言すれば、民主主義は天皇制との対決を正面にすえマルクス主義と結合したとき革命的力をもつこと。資本を屈服従属させた天皇制が深く根をはりブルジョア民主主義

革命が勝利してない日本社会では、民主主義はつねに天皇制に規定され、エセ近代的で、天皇制を背中に刻印されている。これを打ち破ること。革命派のなかにある天皇制的な封建社会主義を一掃しつつ天皇制と対決しなければなりません。天皇制は独占資本の支配のひとつの道具であるとか、遺制であるとか、「ボナベルチズム」だとか、そんななまやさしいものではありません。

天皇制は米帝に庇護され、その余裕ゆえにその必然性をかくし、絶対主義をいくらか「立憲君主」的によそおつてかくしてはいるが、日本社会の深部までもつらぬきとうす頑固な社会・経済・政治体制なのです。だから、天皇制打倒、人民民主主義革命、人民独裁の日本共和国樹立のスロー・ガンは『日帝打倒、社会主義革命、プロレタリア独裁政府樹立』の核心であり、これをぬきにした「日帝打倒社会主義革命」は日和見主義なのです。

国際環境の大激変と世界過剰生産恐慌の深まりのなかで貴兄が指摘される

。国際的には対米民族矛盾から対ソ民族矛盾に移行しつつある。しかし、移行しきってはいません。日本売国反動独占と被抑圧民族との矛盾はいくらか緩和しつつあります。

○国内階級矛盾は、天皇制勢力と日本人民の矛盾が激化

持します。

この持久戦についていえば、米帝など国際帝国主義の対ソ宥和主義が克服され、国際的国内的反覇権統一戦線が順調に発展し、他方でプロレタリア日本革命と世界革命が前進してゆくなれば、ソ連社会帝国主義の侵略を前後とする日米反動独裁体制の瓦解状態が現出されるとき、この持久戦はパリ・コンミューン的様相をもつて展開されてゆくだろうし、それ以上に人民の側が弱体であれば、その中間にフランス・レジスタンスのような様相を過渡的にふくみつつ、ロシア革命における大戦時のボルシェヴィキの闘いから「帝国主義戦争を内乱へ」といった古典的な形態をとるかするであろう。これがどのような形で展開するかは客主の種々な諸条件諸要素に規定され、あらかじめ決めてかかるわけにはゆかないし、それは間違いである――「ソ米帝国主義世界戦争をプロレタリア世界革命と日本革命へ」の展望のもと、持久的に反帝反天皇制の民族民主主義革命の陣型を着実に強化してゆく以外にないわけです。

ても「ソ米帝国主義戦争を軸とする第三次世界戦争の第一段階的情勢」が展開している以上、第二次世界戦争の総括とそこでの諸問題の評価をおこないつつ、これとの比較関連で第三次世界戦争の第一段階・位置・性格として現状をとらえ、諸事象、諸問題を分析整理する観点、方法が必要です。この点に関して、貴兄らがこの課題に種々な議論をまとめつつ体系的に展開したことをその内容とともに高く評価し、基本的に支持します。

現在の国際国内情勢を第三次世界戦争の第一段階にとらえてのこと、「帝国主義とプロレタリア革命の時代」――資本主義から社会主義への世界史的過渡期」規定、「四つの基本矛盾と四つの戦争の性格・形態」「帝国主義論の見地を基礎とした戦争の基本根拠と性格、その展開の三つの段階」などマルクス主義にそった分析です。

また、国際共産主義運動の面では、基本的にコミニンテルン第七回大会の見地に立脚していること、戦争の不可避免性をふまえ、革命の要素を無媒介に爆発させることによつて戦争をおしとどめるないしは戦争にそなえるといった観念論ではなく、ます戦争にそなえ、そのことによって革命の条件を拡大していく戦争と革命の両要素の関連の弁証法的なとらえ方。英仏（米）の対独宥和主義の本質とその実態。これとの関連で存在したスターリンの反ファシズム連

し（その中でプロレタリアとブルジョアジーとの矛盾が増大している）ています。

主要矛盾は国内階級矛盾です。そしてその国内階級矛盾はこれまで指摘したように、人民民主主義革命・社会主義革命派と対ソ宥和のファシズム派と頑迷連合派の三つの階級勢力に分化再編されつあります。かかる「移行期」の時期の戦術をどう設定するかという問題があります。対ソ宥和ファシズムに主要打撃を集中し、対ソ社帝・連中国の面では部分的に頑迷連合派とは連合しつつも主要方向は彼らの対ソ宥和ファシズム派をとりこんだ「連合」の欺瞞をあばき、その反共反人民反革命に対決してゆくことです。

現段階が主要矛盾の移行期であり、彼我とも決戦をやりぬくだけの力がなく、移行にむけ布陣を模索し力量をたくわえてゆく時期であるから、反天皇制ファシズムの反覇権・生活防衛の旗を前面におしだし、プロレタリア・人民は天皇制ファシズム化攻撃・生活破壊には隙間なく積極防衛で闘いつつ、また、ソ米の覇権主義に対して民族的課題をおしだし、人民の民族的自覚をうながし、民族民主主義統一戦線を反覇権統一戦線として組織し、敵の侵攻には徹底してはねかえすが、こちらから権力闘争をしかけるといった、つまり前段階的決戦闘争の攻勢にでず持久的に力をたくわえてゆく段階です。この点で貴兄らの持久戦略を支

合の提起一独ソ不可侵条約一反ファッショ連合の成立の一

転二転三転の関係（ここから肅清の国際的背景が分析できる）。中国が米帝等国際帝国主義の対ソ宥和主義のいかんによつては中ソ不可侵条約の締結に對してフリーハンドであるとの指摘。あるいは現在のキューバ、ベトナムが第二次世界戦争時の独、日ファシズム的突撃隊の位置にあるとの指摘等うなずけます。

いくつかの留保点をのべるならば

② ソ連社会帝国主義論に關して、実態論や帝国主義論Ⅱ独占資本主義論のレベルの展開はあるが、ソ連党の修正主義化とこれによる国家官僚独占資本家階級の發生と所有關係の国家官僚独占資本制所有關係の成立、プロレタリア民主裁のもとでの国有化、計画経済がファシズム的官僚独裁のもつとも欺瞞的な道具に変質したこと、プロレタリア民主主義の官僚的ブルジョア独裁への変質、これらとともにもう個別的資本制所有關係の社会的定着にまではいかないものの国家官僚独占資本を巨大な一個の資本として存在させる価値法則の官僚制所有のもとでの展開や資金奴隸制の搾取と被搾取関係の発生と資本蓄積にともなう国家官僚独占資本と賃労働の敵対關係の拡大、再生産構造における第一部門と第二部門のアンバランス、恐慌の發展と資本過剰と帝国主義的对外膨張の必然性、等マルクスの一般的資

③ ソ連社会帝国主義論に關して、実態論や帝国主義論Ⅱ独占資本主義論のレベルの展開はあるが、ソ連党の修正主

義化とこれによる国家官僚独占資本家階級の發生と所有關係の国家官僚独占資本制所有關係の成立、プロレタリア民主

裁のもとでの国有化、計画経済がファシズム的官僚独裁のもつとも欺瞞的な道具に変質したこと、プロレタリア民主

裁のもとでの国有化、計画経済がファシズム的官僚独裁の

もつとも欺瞞的な道具に変質したこと、プロレタリア民主

裁のもとでの国有化、計画経済がファシズム的官僚独裁の

本主義批判を視座とする分析が少ないとこと。

これらの国家官僚独占資本主義の一般的經濟的基礎、このことと結びつけ資本蓄積・國際競争力の脆弱性からくる軍事力による補強、軍事経済化、後發帝国主義としての世界霸權主義・好戦性を論じたらもつと鮮明になります。

④ コミュンテルン第六回大会の総括と第七回大会の評価を厳密にやっておく必要があること。これが當面の理論思想の闘争のひとつの環なのです。これを四人組批判（アルバニア批判）トロツキー批判、新左翼批判と結びつけつける必要をもつと自覺すべきです。

⑤ 「世界戦争の第一段階」といいつつも、他方では、世界の主要矛盾は「依然として帝国主義と被抑圧民族の矛盾にある」としております、ソ米の帝国主義相互の矛盾が主要矛盾化し、この現われに規定された存在として、第三世界の民族人民の闘いが反帝反植民地・民族解放の闘いからこれを残しつつも、勝ちとった独立を霸權主義の侵略の争奪戦からまるまる反帝反霸權独立防衛戦争の闘いに転換していくつつあることははつきりされていません。世界の基本矛盾の中の主要矛盾は明らかに移行してきているとみるべきです。

⑥ 「第三次世界大戦が勃発するならば、ソ帝の侵攻に対しては中国と連合して民族防衛戦争の先頭にたつて闘い、対

すると一面的になる危険性があると思ひます。

△了△

一九七九年五月二二日

一向健

支配階級がソ米のいざれかに結託して帝国主義戦争を發動するならば、これと反戦闘争でもつて闘い、どちらにせよ革命情勢の成熟とともに国内革命戦争へと転化し革命と社会主義の勝利のために戦争するであろう」（創刊号三頁）

とのべていますがこれは基本的に正しい。これが基本です。

ただし、世界戦争が世界的規模でその無数の諸関連のなかで発生するのですからソ連の日本侵攻に對して条件のいかんによつては、日帝が米帝と結託している関係から、日中連合のみにならず日中米の連合もありますし、日・中・米・西欧のいずれかへのソ連の侵攻に對して四者が連合して闘う場合もありうるし、こういう場合もあらかじめ排除して考えてはならないと思う。

⑦ 米帝国主義など国際帝国主義がソ連社会帝国主義を中國に向かわせ、ソ中を開拓させて兩者をクタクタにさせ、そのあとで対ソ戦や対中戦をおこなおうとするもうひとつの中帝主義の戦争戦略をしていないことに関してもつと強調し、これとの関連で中国や国際プロレタリアート・人民主敵の反霸權民族民主主義革命に再転換したりすることがありうることを強調しておくべきと思ひます。毛主席の論文の掲載（「アカハタ」二号）は役に立ちますが、これは中ソ不可侵条約後のことの論文ですからこれだけを基準に

資料
1

レリーシン的一段階單層の獲得を

「資料」としてここに掲載する一つの論文は一向健氏と立志社「アカハタ」編集委員会との最初の討論である。

——「マルクス主義」編集委員会

『アガハナ』編集局の皆さんへ
一月二九日 立志社発刊の創
刊号受けとりました。ありがとう。
書社の編集方針を紙面からみる

マルクス・レーニン主義、毛沢東思想(従つて、当然スターリンも支持している)を指導思想としている」と、現代世界を四つの基本矛盾として把え、ソ連が戦争の第一の策源地となつたソ米両国

筆の不舌説性現実性の暴露論のうえにたたいた「三つの世界論」の風塵にたつてゐる。当面の一時代に於て、ソ連社会帝国主義を重視しつつ反霸權と天皇制の反動化をアシズム化と把え強調し、これとの対決を前面に押し出してゐること。とりわけ、世界的規模でのソ米の霸權争奪戦と戦争の要素の増大に対して、ソ連社会帝

國主義の抗戦主義如何によつては、或いはそれを前提とする論議の条件の変化如何によっては、或いは対日侵略の動向如何によつては、或いは対ソ反復民小ブル「社会主义革命」の方針如何によつては、対ソ反復民連合がありを重視し、その中でプロレタリア闘争を承認、「これに大のハゲモニ（つまりプロレタリア闘争）と補完としている」とアヌンツィオーネ・ソシエタ主義の指導権の諸点がうかがえます。この点を擡げてゆき、民主主義の敵をかくす、同時に民主主義革命を社会主義

革命に發展転化してくるべし」と、一段階戦略に近い立場・觀点、方法についてもよろしく思えるので、この點を評価します。

小ブル「社会主义革命」

路線の克服を

下部構造のズレはそれこそ革命に
権力の移動はありません。権力と
距離なしには平和的なし崩し的ない

「社会主义革命を含み、これに連続する民主主義革命

革命をやれば全て解決する」といつてゐるに過ぎぬ、正しく反映は「社会主義革命を含み、「われに連続する民族民主主義革命」が正しいのです。

今一々、皆さんが、マルクス・主義になりました。マルクス・主義の最大限綱領を綱領の原則的部分の一般的批判—プロレタリア階級の主張として綱領に書く場合は、マルクス・レーニン主義に従うただけで、ソ連主義革命—プロレタリア党建設としてないのを踏ましてしまはず、書く必要があ

カンボジアへのベトナムの侵略
植民地化戦争や「北方領土」問題等
への態度を支持します。

。御書院

資料 ②

2

連続革命と革命発展段階論こそが要 ＝一向氏への返信＝

立志社 常盤いたる

「アカバタ」創刊号に対して、の回目の意見交換をふまえて、簡単に早速、誠意ある批判と意見をちやうだいしたところ、心から感謝いたします。長期拘留攻撃一獄中というので、是非卒直な反批判をいたたいて、困難な条件下に置かれたながら、情き、御教示いただいて、私たちの勢の変化、發展に鍛鍊に応え、絶えぬやかな事業に援助していただきまぬ思想、理論的貢献を通じて、ければざいわいです。

日本革命に尽力されておられる「日本革命」に敬意を表します。返信が遅れて大変申し訳ありませんでしたが、編集局の若手の同志たちと相談し、また、獄外のあなたの同志と

思想上の一致をかちとろう

私たちあなたの方の、理論表現上現在もとも大きな相異点となつた方と我々との間にある現在的な解決しなくてことが可能と思いま意見の相異は、日本の国情に關す。ですが、そのためにも、思想方法の認識上の問題にもまして、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想の体系的把握・理解、とりわけ、るよに思われます。双方の実践革命戦略・戦術論上のそれ、主的経験のちがいを、団結の障害たる起因しているように思いましめないためには、なんとして日本社会の性質に関する認識も、思想上の根本的一致をかちとろす。その相異は、具体的な事実を基礎に、るものこれが不可欠です。

あなた方は、「日本革命路線を論的立場に離つてゐると思ふるの」は（こゝ）あるのでしょうか？

言ひないまでも、「一段階戦略」であつて、決して「二段階革命論」ぢやない、主觀主義的創発運動による革命路線によつて右翼日和見主義が誤りを犯す可能性がある。

レーニン的二段階戦略の觀点に立 です。

たゞ、反ソ帝室電視のプロレタリアート独裁のベガモニーをもつた命論と修正主義の「二段階革命論」を、いずれも革命を敗北に導いて社会主義革命へと強行転化論を、いぢれも革命を敗北に導いてアーティア革命を抑止した見主義を生み出します（勿論、逆ブルジョア的動搖性の結果であり）、アーティア革命を押し出した見主義を感じざるをさせん。「左」翼曰く「左」右の小ブルジョア的和二インターの日和見主義・修正主義の場合もあることは言うまでもない。ただに人為的な万里の長城を築いて、「二段階革命論」は右翼日和見主義も右翼日和見主義も小占うどらんなのかはうきりわから見主義理論だと考えており、マルクス依存との鬭争を通じて守り、口立てですが…。我々は、あなたからこゝでマルクス＝レーニン主義を離さない（民族民主主義革命）とクスリ＝レーニン主義、毛沢東思想、シア革命の実践の中で繼承・發展した方が、マルクス＝レーニン主義・毛沢東思想をつかんで離さない定式化しておられるようですが、の連続革命と革命發展段階論こそ、されたのであり、のマルクス＝毛沢東思想の連続革命と革命発私には、この定式は多分に「左」がプロレタリアートの革命的なな戦略的実験であることを確信し、翼日和見主義＝トロツキズムの永続戦術理論であることを確信し、展段階論を更に、全面的に受け継ぎし、トロツキズム的な「社会主義」かねないことを、我々は肝に銘じ続革命論で、右翼日和見主義、修復的な「左」を、もとと整理、ぎりぎり、發展させたのは、スターリンではなく、毛沢東同志があつた、と我々は考へます。

正義論的で、右翼日和見主義、修復的な「左」を、もとと整理、ぎりぎり、發展させたのは、スターリンではなく、毛沢東同志があつた、と我々は考へます。

今度は、スターリン的「民族民主化」に折衝しているようなら偉大な成果を、我々の戦略・長くなりましたが、結論的に言

ものば、一体、当面する革命のははないものと思つてゐます。そもそも段階戦略の觀点に立つた革命路線によるものば、東洋革命の見地

連続革命と革命発展段階論 の獲得を

の獲得を

この革命の基本綱領——ソ米帝国、ソ帝主義、日帝の対ソ宥和、天皇制国家権力の打倒——プロレタリア階級の大連合を組織し、国民党権立・反帝權自主独立の政治的民主を發展させ、革命の主導的勢力を編成し、拡大する」となります。

日本の政治情勢を規定する四つの基本矛盾、すなはち対外的には①ソ帝権主義との矛盾、②米帝主義との矛盾、③韓国をはじめとする東南アジア、第三世界の民族・民主主義闘争は、思うまでもなく、当面する日本プロレタリア被抑圧民族との矛盾、そして対内反帝社会主義革命の一部であり、したがって、我が労働者階級の反ファシズム人民連合なのです。

的には、アルジニアジーとアロレ、プロレタリア階級と社会主義タリアートを中心とする階級矛盾をめざして闘かわなければなりません。現段階において、人民運動の中では、その比重と相互關係は次第に重くなること、対外的矛盾と合の直接的な主要打撃の次先は、対内的矛盾ではないまだ対内的階級矛盾のうちで、その比重と相互關係は次第に重くなること、この闘争を通じて社現代修正主義やトロツキズムの改良主義の反動性を暴露し、この影響下にある労働者人民の对外的矛盾の中では、ソ連帝国の對ソ宥和の如くなっている。しかも、現在的に直接的、な革命情勢は存在せず、革命の主體的力は準備と編成は極めて低く、支配階級の矛盾を拡大して、總體的に敵の力を弱め、味方の勢力を擴大して力關係の轉換を進め、相互關係と革命の發展段階における

戦後革命における
着用面

諸問題について

政治路線について

迷子にならぬ物たる心願に満ちる。

国家権力の性格——國家官僚統治
資本階級と金融寡占資本階級は階級的基礎とした、ブルジョア独裁の一形態としての大皇室制権力。
革命の主体勢力——下層労働者階級を指導階級とし、労農漁三大生産階級と被抑圧民族、被差別大衆を主力軍とする。
以上が(1)当面する日本革命の性質とその基本綱領が明らかとなつた。すなはち、対外的にはソ米帝国主義の支配・抑圧に反対し、これを一掃する反帝(民族)革命、対内的には日本帝国主張天皇制国家権力を打倒し、官僚的國家統治主義を改進して、反朝權・自主独立の社会主义日本を建設する」とであり、この革命の過程全体を一貫して指導するのはプロレタリア階級である。
これがまとめる。

この問題について、戦後革命については、人民権力の樹立までの道筋がなかったという限りにおいて確かに敗北ですが、同時に、自由民権運動以来のアーチークの誤りを生み出しましたが、その責任は決して徳田同志をはじめとする当時の党指導部に帰せられることは、決して徳田同志をはじめとする当時の党指導部に帰せられないのです。なぜなら、マルクス＝レーニン主義の革命精神と日本の国情をもとに実行された極めて大きな成果をあげたからです。次其黨員以降の党建設の失敗に起因するものと結括しています。すなわち、マルクス＝レーニン主義的半封建制を解体し、民主主義建設することに成功します。小平洋の改革を実現した眞の力は、決してルシヨアの日和見主義と事大主義、帝室占領軍權力にあったのではなく、その要素の深入によって天皇制に敗北したのです。徳田球一同志をはじめとする北して崩壊を余儀なくされ、戦後革命の偉大な成果を生み出しました。このことは、徳田同志をはじめとするプロレタリア革命家たちの献身と努力が、徳田同志をはじめとする共産党的人民主主義革命にあつたと考えます。我々は這頭の条件によつて、徳田球一同志をはじめとする共産党的条件によって、徳田同志をはじめとするプロレタリア革命家たちの献身と努力が、今はまだそのよつて情勢ではない、というのが我々の見解です。

予約購読を

マルクス・レーニン主義毛沢東思想研究

マルクス主義

季刊

第2号予告

特集 連合赤軍再総括

一向 健
植垣 康博
永田 洋子

定価 400円(送料100円)

9月10日発行

申込み先 (〒)100-91
東京中央郵便局私書箱第1292号
日本社会科学研究所

主義を覆いかぶし、指導権を奪い取るために、その部分的誤りつけ込んだ富本の修正主義分子の方々は、ソ連のフルシチヨフと同様のものであり、とうてい許がたいものです。彼らに批判の資格はない、戦後革命の総括などやれはるはすもありません。我々は、断固として徳田同志らのプロレタリア精神と革命実践を継承し、戦後革命の総括の上に日本革命の未踏の境地を切り拓くではありませんか。

我々は、本当に團結と信頼を打ち固めるためには、大いにケンカしなければならないと考えています。分化・再編は策であり、仲睦まじく見えたものが不和となり、腹の内を出してケンカしごられる人は軽みになるのです。團結のための率直な批判と、論争の継続を心から希望します。

更なる奮闘と健康を祈念して、
我々の挨拶を送ります!

一九七九年四月十日

『アカハタ』編集局員
常磐いたる

マルクス・レーニン主義毛沢東思想研究

1979年8月15日発行

マルクス主義 創刊号

定価 400 円

編集・発行 日本社会科学研究所
(マルクス・レーニン主義毛沢東思想)

連絡先 (〒)100-91 東京中央郵便局私書箱第1292号
日本社会科学研究所